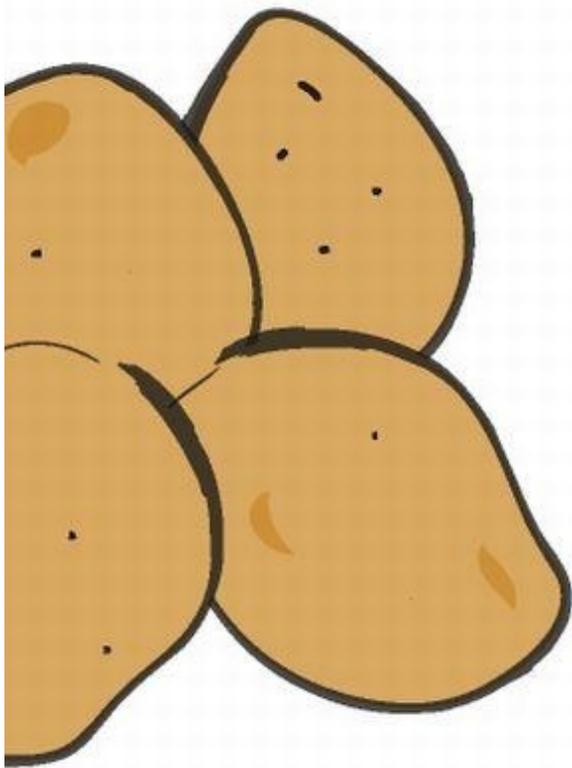


# 最後の晚餐

めけめけ



## 土曜のタマネギ

---

1 1月、街はすっかり冬支度を始めていた。  
気の早い恋人たちは、クリスマスが待ち遠しくてしかたがない。  
今日は土曜日。  
2週間前から約束していた。  
彼が遊びに来てくれる。  
このところ忙しくて、ろくに会う機会もなかった……のだと思う。

わたしは、近所のスーパーに買い物に出かけた。  
よく晴れた気持ちのいい天気、わたしの心は弾んでいた。  
「大丈夫、きっと大丈夫」  
彼の心が少しずつ自分から離れているのを感じていた。  
恋愛は初めてじゃない。  
今がどういう常態なのか、客観的に見ても「まずい」と思う。

彼はとても優しくしてくれる。  
やさしく包んでくれる。  
わたしはそれに甘えて、少しばかり浮かれていたのかもしれない。

彼はまじめ。  
まっすぐわたしを見つめてくれる。  
わたしはそれに耐え切れずに、目をそらしてしまう。

彼の優しさはわたしを不安にさせる。  
彼の純真さはわたしにはまぶしすぎる。

時々思いつめたような表情をする彼にわたしは何もしてあげることができなかった。  
だから今日は……

だから今日は暖かいポトフを作って――  
作って……わたしは彼に甘えるの？謝るの？  
それとも……

料理を作るのはいつ以来だろう。  
去年はよく、彼の部屋に行って料理を作ってあげたっけ。

「ねえ、お砂糖どこだっけ？みりんある？」

彼はわたしが作ってあげたのと同じ料理を見よう見真似で作ってくれたこともあったっけ。

「すごい、ちゃんと肉じゃがになってるよ」

別にすれ違いとか、そんなんじゃないの。

彼が変わったわけでも、わたしが変わったわけでもない。

でも、少し背伸びをしたのかもかもしれない。

彼もわたしも――

だからちょっと疲れただけ...ただそれだけ...

「痛っ！」

ニンジン切る手がすべって、わたしは小指に小さな傷を負った。

「もーう、バツカみたい！」

もう彼に笑われちゃうわ

でも、本当に笑ってくれるかしら.....

わたしには小さな傷の跡をひどく心配そうに眺めている彼の姿が目には浮かんでいた。

日はすっかりかげり、不安な気持ちが募り始めていた。

「来るかなあ」

きっとくる。

彼は今まで約束を破ったことはない。

どんなに遅くなっても必ず会いに来てくれた。

わたしとはちがう.....

「プルルル...プルルル...」

期待を裏切って電話のベルが鳴る。

電話に出たくない。

お願い、誰か、電話のベルを止めて.....

「もしもし.....」

「ごめん、俺、いけない...もう逢えない...ごめん」

「うん、わかった.....じゃあ」

「えっ...あああ...じゃあ、元気で...」

「うん、大丈夫だから...大丈夫だから」

ゆらゆらスープの海を 小船のように漂う  
行き場のないカケラ まるでわたしの気持ちみたい  
つめたい電話のせいね 火を止めるのも忘れた  
踊りつかれたでしょう ため息ついたポトフ

WHY.WHY.WHY? ほほをそめて  
おなかすかせた恋人を  
待ちわびていたのに

みんな幸せね土曜の夜 街もはなやいでいる  
どうして おまえとわたしだけ  
こんな目にあうのかしら

さよならニンジン・ポテト 宇宙の果てへお帰り  
胸に残り火ごと 残部捨ててきたと思ったのに  
おなべの底にタマネギ ひとりしがみついている  
イヤヨ、アキラメナイ!...たぶんこれがわたしね

WHY.WHY.WHY? 今夜わたし  
いらないオンナになりました  
ころがる床の上

バカげた小指のバンソーコ 見せるつもりだった  
いっしょに笑ってくれないの?  
いつもの土曜日なのに

独りぼっちの晩御飯。

不思議と涙は出なかった。

「わたし、こんなに料理下手だったかなあ……」  
ポトフを食べる前にわたしの涙はすでに枯れていた。  
ポトフはいつもよりも、少し、しょっぱい気がした。

もう、背伸びしなくていいんだ。

そんなことを思い出したら、また、涙が溢れ出した。

「背伸びしてたわたし、バイバイ……」

土曜日のタマネギ』 作詞:谷山浩子／作曲:亀井登志夫／歌：斉藤由貴／コーラス：久保田利信

## あいつなんか

---

彼と出会ったのは……去年の12月。

街の中を歩けば、Wham!のラストクリスマスや山下達郎のクリスマス・イブが聞こえてくる。

「きっと、きみは、こないかあ〜」

わたしは仕事帰り、一人家路を急いでいた。

住み慣れたこの街も、気がつけば少しずつ変わってきている。

女一人でも気軽に入ることができたショットバーは前の年につぶれてしまい、駅の反対側に住んでいた学生時代からの友人も、同じ頃に結婚して引っ越してしまった。

居場所がない

もうすぐクリスマスだというのに、スケジュール張には仕事のことと、実家に帰ることしか書いていない。

「みんなあいつがわるいんだ」

別に[ふられたわけじゃない。わたしからおりただけ……](#)

「あれー、そんな歌詞のヒット曲、昔なかったかなあ〜」

わたしはいつもどおりだった。

いつもどおり恋をして、いつもどおりアプローチした。

あいつは恋の駆け引きとか、遊ぶとか、そんなこととは無縁なタイプ。

すぐ手の届くところまで近づいて、お互いに見合ってしまった。

ちょっとなれた男なら、すんなりことは運んでいたはずなのに……あいつったらちっとも煮え切らなくて、わたしは作戦の失敗を認めつつもこのままでもいいかなあと思っていた。あの娘（こ）が現れるまでは。

妹タイプっていうんだろなあ、あーゆーの。

わたしは最初から相手に甘えたりするのはどうも苦手だったし、自分のことは自分でやりたいし、相手を束縛するのも好きじゃなかった。

何回かご飯を食べたりカラオケ行ったりして、すぐにピント来た。

この娘、あいつに気があるんだ……

あの娘はまるで風船のようにふわふわしていて、少しでも乱暴に扱おうものならすぐに壊れてしまいそうで……だから周りには誰もがあんたのことを『守ってあげたい』と思ってしまう。

でも、彼女が守って欲しいのは『誰でも』ではなく『あいつだけ』なのはすぐにわかった。

あいつもそうだけど、あの娘も世間ズレしていないまじめなタイプだった。

もし、友達になれたら、きっと彼女の恋を応援しただろう。彼女はそういう星の下に生まれたのだろうし、わたしもきっとそうなのだ。

あの二人をみていると、どうにもわたしの居場所がないような気がした。

だから、わたしは……だから、わたしは少しだけ背伸びをしようとした。

そんなとき、彼が現れた……それはまるで運命のようだったし、信じられないことに二人を結びつけたのは一本の糸だったというのは、本当の話なのだから。

## ダンスはうまく踊れない

---

「あの一、糸くずがついてますよ」

近所のスーパーに買い物に来ていたわたしは、少しばかり高いキャベツとにらめっこをしていた。

「えっ？」

不意に後ろから声をかけられて、ビックリしたのもそうだけど、その男性が買い物カゴを床においてジェスチャーで糸くずの着いている場所を示してくれたことに、一瞬反応が遅れてしまった。

「失礼」

彼の大きな手がわたしのあたまについている茶色の糸をつまんでくれたときは、多分少女漫画の主人公が憧れの先輩に声をかけられてオドオドしているような様になっていたに違いない――思い出だけでも顔が赤くなる。

「あ一、あ一、すいませ……あ、ありがとうございます」

誤ることではないのに、あまりにも――わたしたたらかなり無防備な状態だったから――突然だったので、つい「すいません」と言いかけて慌てて言い直した。彼は糸くずをわたしに見せて、「どうぞ」というような目でわたしを見つめた。慌ててそれを受け取るわたし。

「キャベツ、高いですね」

それはもう、わたしの体温を上げるのに十分な素敵な声で彼は言った。

「あ一、そうですね。買うかどうか迷っちゃいますよね」

「しかし、迷ってもこれしかないから……」

そうやって彼はキャベツひとたまを軽々と片手で掴み、キャベツをひっくり返して芯を眺めた。

「うん、これにしよう。それじゃ」

そういえば聴いた事がある。キャベツの選び方――芯が大きすぎるとダメなんだっけ……そうじゃない、糸くず！なんで糸くずなんか……

「あっ……あのときか」

夕方に打ち合わせに行ったクライアントはアパレル関係の会社だった。わたしはwebデザイナーで、そこで扱っている商品をいろいろと見せてもらったのだが、たぶん、そのときに体のどこかに着いたのか……なんにしても会社からここに着くまでの1時間弱の間、わたしは頭に糸くずをつけたまま、歩いていたことになる。なんという失態……

「あれ？糸くずは……どこ？」

わたしの手にはしっかりとその糸くずが握られていた。

「これって『運命の赤い糸』ってやつ？でも、わたしのは赤じゃなくて茶色なのね」

わたしは一步踏み出して、少しばかり高いキャベツを買うことにした。

12月。スーパーには『年末セール』の文字が躍っている。どこかふさがちだったわたしの心は、少しだけ踊りだしたような気がした。ただそのダンスは少しばかりぎこちない。

わたし.....

### ダンスはうまく踊れない

部屋に着き、買ってきたものを冷蔵庫にしまう。

「あー、やだー、わたし、なにこんなにいっぱい買い込んでんのよー」

冷蔵庫の中は一杯になっていた。ひときは目立つのはキャベツひとたま。

「誰が食べるのよー」

わたしは男の人が食べる姿を見るのが好きだった。だから冷蔵庫の中にはすぐに炒めて食べられるような食材が入っていた。誰かとつきあっているときは.....

「おい、どうした、あたらしい男でもできたか？」

冷蔵庫が不敵にわたしに問いかける。

「もうすぐオレもお払い箱か？」

バターン！

さっきまで浮かれていた自分が疎ましかった。

「なに考えてんだろうー、わたし」

いったいどんなひとなんだろう？

そう考えずにはいられなかった。その日寒がりのわたしが部屋の暖房を付け忘れていることに気付いたのは、シャワーから出たときだった。

### 『ダンスはうまく踊れない』

作詞：井上陽水 作曲：井上陽水 唄：高樹滯

「ピピピピ……朝だ、朝だぞ、いつまで寝ている……ピピピピ」

いつもなら目覚ましが鳴り響く前に目が覚める。

ピピピピ……ピピピピ……ピピピピ……

「うわー、もう、なんて朝なの」

髪をかきむしりながら、うつぶせの体制になり、枕に顔をうずめる。手が届きそうで届かない。そんな位置に目覚ましを置いておくのは、長年の経験から年に1回か2回、目覚ましを止めて二度寝をし、化粧もほどほどに家を飛び出すことがある。まさに今日がそんな日だった。

「ピピピピ……朝だ、朝だぞ、いつまで寝ている……ピピピピ」

「はい、はい、今起きますよー」

部屋の中の話し相手は、冷蔵庫と目覚まし時計、トースターにやかん、それから――つまりは部屋の中にあるものすべてがわたしの話し相手になってくれる。

「うー、あんまり眠れなかった……」

昨日の出来事。彼との出会いの余韻がワタシに簡単に眠ることを許さなかった。不覚にも彼の顔はあまり覚えていない。まともに見れなかったし、あまりにもすっきりした顔立ちだったので、特徴的をつかめなかった。覚えているのは見上げるほどに大きな体とそれを包み込むとまるでマントのようなトレンチコート、キャベツを鷲掴みにした大きな手、そして……

「そしてあの子宮に響くような低い声……やばい、またドキドキしてきちゃったあ」

洗面所にいき、朝がスタートする。洗顔、歯磨き、にらめっこ。

「今日のあたしどうよ？」

バッチリの笑顔で鏡に話しかける

「いいんじゃない？まあ、昨日ほどじゃないけどー」

「どうせ一日ごとにおばさんになってますよーだ」

鏡はいつも正直にものを言う。まるで学生の頃の女友達みたい。

トーストを手早く焼く。

「ガチャン！焼けたぞ！どうだい今日の焼き加減は」

「別に、いつもと同じ……おいしいわよ」

トースターは機嫌が悪いと煙を上げて怒り出す。

台所でお湯を沸かす。

「ピィィー……おい、お湯が沸いたぞー」

やかんがけたたましくわたしを呼びつける。

「あーい、もう……ピィピィピィピィもう少しましな音はでないのかね。あんたは」  
コーヒーを流し込む。インスタントコーヒーはまさに人類最大の発明品だ。

テレビをつけて天気予報と今日の占いをチェック。

「可もなく不可もなく……かぁ」

もしかしたら運命の出会いとか、積極的に攻めろとか、変化が現れるような占いがあれば、もしかしたら、また会えるかもと淡い期待をしていた自分に気づき、少し不機嫌になる。

「バッカみたい」

なにも変わらない朝……少しくらい変わってくればいいのに。化粧も服装もばっちり。鏡の前には昨日とまったく同じ自分がいた。その前も、その前も、そしてこれからも？

「ふー、いきますか！」

別にふさいでなんかいない。わたしは何も変わっていないのだから、何を期待することがある。ただちょっと、素敵だなと思う人が現れて、そしていなくなっただけじゃない。こんな気持ちにゆれてしまうのは、あいつのせいなのか？

「あいつ、今頃どうしてるかなぁ」

携帯電話のアドレスを眺める。あいつと電話をしたのは……あれは確かパソコンがうまく動かないとかで、あいつからかけてきたんだっけ

「まったく、ユーザーサポートじゃないんだからね」

「ゴメン、ゴメン、他に頼れる人いなくて……」

電話口の向こうで、あいつが髪をかきむしりながら、それはそれは立派にはにかんでいる姿が目についた。そして『他に頼れる人がいない』という言葉が、わたしの心を揺さぶった。

「もう！こんなことで夜中に電話かけてこないでよね」

ちがう。そうじゃない。わたしは夜中でも明け方でもいいから、かけて欲しいと思っている。だけど、それって何？わたしは何を期待しているの？何を望んでいるの？

「あー、そうか、あれ以来か……」

そうだった『あれ以来』電話で話していないし、『あれ以来』なんだ……[眠れない夜](#)を過ごしたのは。

玄関を開けると外はひんやりとした空気に包まれていた。昨日と同じだけど、この空気は昨日ここにあった空気じゃない。

パン！パン！

わたしは両手でほほを叩き、いつもの気合を入れた。高校時代陸上をやっていたわたしは、スタート前にいつもこうして集中してた。いつからか朝家を出るときは必ずこうやってほほを叩いている。家から駅まで10分。わたしの足取りはいつものようにしっかりと、軽やかにいつものリズムを刻んでいる。スイッチが入ったわたしの頭の中は、今日のクライアントとの打ち合わせのことですでに頭がいっぱいになっていた。

飲もう！

---

「あー、もーダメダメ」

わたしは自分のデスクに身をうずめてもがいた。彼の――あのキャベツを驚づかみにしたあの人のことが頭から離れない。背の高いコートを着た男の人の後姿を見るたびに胸がときめいてしまう。

「どーしたんですか、先輩。プレゼン、だめだったんですかぁ」

わたしは親指を突き出しサムズアップポーズを決めた。

「えー、よかったじゃないですか、でも、何か問題でも」

後輩のサッチンは鋭い嗅覚を持っている。それもかなり天然の。

「今晚ヒマか？」

「やだー、そんな先輩からのお誘い断れるわけじゃないじゃないですか〜、で、で、なんですか、なんですかぁ」

「その話を聞きたければあと二人ほど声をかけなさい。ただし……」

「――ただし、男子禁制ですね」

「肉だ。肉。肉食おう」

わたしの社内でのポジション――いつの間にか上には役付きのお偉いさんしかいなくなってしまった。リーダーなんていわれるのは、なんとも苦手だけど『姉（あね）さん』と面と向かって言う男子社員は後ろから蹴飛ばしてやった。

――わたしは姉御肌なんかじゃないのに、どうもこの職場はそういうキャラを無理に人に求めてくるきらいがある。

確かにデザイナーとかPC使う仕事の人、文化系が多い。わたしは3年間陸上部に所属していたから、他の人に比べれば、体育会系のオーラが出ているのかもしれない。でも、わたしはそんなに純粋な陸上少女じゃない。

「乾杯！おつかれー！」

女4人。月に一度はこうしてガッツリ焼肉を食べる。

「契約成約おめでとうございまーす」

今月もどうにかノルマを達成できた。別に会社でノルマを課しているわけではないのだが、予算を持つということは、結局そういうことなのだ。

「まあ、これもアッコのイラストのおかげよ。あの女の子のイラスト。クライアントにすごく評判よかったんだからあ」

アッコはデザイナー。彼女と組んだ仕事の成約率は実に高い。

「さすがはゴールデンコンビ。決める時はきめますねー」

「ちょっと、そのゴールデンコンビっていうの、もうやめてよー」

「えー、なんでですかあ、だって部長はいつもそう呼んでますよー」

部長は管理者としてはそれはそれは有能な上司だ。数々のわたしの失敗をフォローしてくれた。誰からも信頼されている。唯一つ不満なのは、ネーミングのセンス。それは部長の人心を掴む一つのテクニックではあるのだろうが、とても広告を生業としている人間のセンスとは思えない。

「でも、でも、今日はそんな話じゃないでしょうー。先輩なにかあったんですか、もしかして、もしかして」

「コラコラ、そんなに煽るな煽るな。あまり期待されると話しづらくなるでしょう！」

別に会話に入るのが嫌だったり苦手だったりするわけではない。キヨミはただただ焼肉が好きなのである。

「すいませーん。カルビ二人前とタン塩二人前追加おねがいしまーす」

わたしは彼女の食べっぷりを見るのが好きだ。わたしも安心して暴飲暴食できる。

「あんたたちこそ、どーなのよ。最近うまくいってるのー？」

「えー、それ聞いちゃいますー。わたし、暴れちゃいますよー」

しめた！かかった。今日はサッチンに酒の肴になってもらおう。まさかこの歳で一目ぼれしたなどと、口が裂けてもいえない。

[飲もう 今日はどこん 盛り上がりよう](#)

## LONELY BUTTERFLY

---

「あれー、なんか今日は先輩の話聞くはずじゃーなかったでしたっけー？」

会計を済ませて店の外に出るとサッチンが急にわたしに絡んできた。少し飲ませすぎたか。

「いーの、いーの。それは今度のお・た・の・し・み」

「わー、やだー、先輩か・わ・い・いい。もう、どーして世の中の男どもは先輩のこと放っておくんですかねー」

おいおい、だいじょーぶかぁサッチンーっていうーか、余計な御世話だぞ、『カッコ笑い』。

「こら、もう、調子に乗って飲みすぎるんだからサッチンはー」

こういうときにキヨミは頼りになる。彼女がどんなに食べようともどんなに飲もうとも、前後不覚になったことを見た事がない。

「先輩、大丈夫ですから、ワタシ、変える方向同じなんで、途中まで送っていきますから」

「そう、もし大変そうだったらタクシー使っていいからね。領収書くれたらわたしが何とかするから」

世の中にはついていい嘘といけない嘘があると誰かが行ってたけど、これは前者のほうだと部長が言ってたっけ

「流石先輩、頼りになるー」

「くれぐれも他言無用だからね」

「あいあいさー」

キヨミの前の彼氏の口癖らしいことを聞いたのは、去年の今頃だったっけ.....これはキヨミとワタシだけの秘密。

「じゃーね」

こうして彼女たちと別れた。別れて5分。駅に着く頃にはすっかり余韻は冷めていた。電車に乗って一駅。すでに気分はブルーになっていた。

「素直じゃない.....かぁ。なれるわけじゃない。小娘相手に――『カッコ笑い』じゃなく、『かっこわるい』」

少しお酒を入れてみんなでワイワイやれば、気もまぎれると思ったわたしが馬鹿だった――気をまぎらわせる？いったい何から？

わたしは「わたし」に対しても素直になれなかった.....だってなれるわけがない。

最寄の駅の改札を出る。家までは10分ほどだが、ここは比較的夜でも人通りが多い街。部屋の前に着くまでにわたしの胸が苦しくなった回数は3回だった。

「わかっているわ。そう。嘘よ。これはどっちかといえばついてはいけない嘘なの？」

わたしは自分自身に嘘をついていた。

「彼の顔を覚えていないんじゃない。思い出したくないだけ……だって、だってそっくりなんかも。あの人と……」

どこか彼の面影を思わせる男性の姿を見かけるたびに胸が痛くなる。帰り道を急ぐ人影の中に、いつの間にか彼の姿を探してしまう。そしてあの人の影を追いかけてしまう。

「よし、泣くか！」

わたしは本棚から一冊のマンガを取り出した。中学生のとき、友達同士で回し読みをしてみんなで泣いた。このマンガを開くと情景反射的に涙が出てくる。ブルーな気分になった時は、思いっきり泣けばいい。わたしはこうして数々のピンチを乗り越えてきたんだから！

そしてきっと、夢を見るにちがいない――

一人、寂しく彷徨う、蝶々の夢を……

LONELY BUTTERFLY

作詞：NOKKO 作曲：土橋安騎夫

## 涙の数だけ

---

「うわー、もうこんな時間」

土曜の朝のわたしは、そう、誰にも見せられない。100年の恋も冷める瞬間は毎週この時箇に訪れる。もっとも今は余計な心配というより無駄な妄想だと目の前のわたしがマヌケな顔でほくそえんでいる。

「あーあー、今日はまた、一段とお美しゅうございますなあ〜」

「う・る・さ・い。黙って仕事しなさい」

鏡の仕事はいつも完璧だ。常にありのままのわたしを映し出す。だから嫌いだ。だから安心だ。

「お腹すいたー」

冷蔵庫の中を物色する。いつもはがらーんとしている土曜の朝の冷蔵庫の中は、相変わらず食材で一杯だ。

「たまにはやりますか」

タマネギ、ニンジン、ジャガイモ……そしてキャベツとウインナー。あー、エプロンエプロンと。

家を出るときにお母さんが買ってくれた寸胴鍋。「こんなの一人暮らしにいらないよ」というわたしに「なに言ってんの？いつまで一人暮らしするつもりなの？」と茶化したお母さんの横で、どこか不満げにお父さんが鍋を見つめていた。今のところ期待に添えず、こうして一人がんばってます。

「随分と久しぶりだね。お嬢ちゃん。1年ぶりかな？」

「そんなことなあい！パスタ茹でたのは確か……」

「パスタ、ラーメン、うどんにそば……麺類みな兄弟」

コンロの火をつけると鍋は自分の仕事に戻った。

「えーと、確かこんな感じよね」

やると決めたら確かな手際で迷いはない。どうせ食べるのはわたしだけ。少し塩加減を多めにして、昨日流した塩分を補給しないと。

「どーよ、なかなかのものじゃない！」

お腹がすいていたからか、塩分が足りなかったからか、今日のポトフはなかなかのものだった。昼真っから料理をしたのは久しぶりだ。気分は上々。ちょっと寒いけど、窓を開けて外の空気を部屋に招き入れた。

「うー、寒い……けど気持ちいい」

全ては「彼」へと繋がっていた、昨日の夜のことも、ポトフと作ったことも、そして気持ちのいい空が広がっていたことも。

「洗濯したら、買い物に行こーかな」

洗濯機は無口だ。黙々と仕事をこなす。掃除機はいつもわたしの鼻歌を馬鹿にする。

「それいつの曲だい？随分懐かしい曲だよね。あー、そこ違うよ。そこはねー」

「もう！邪魔しないでくれるー！せっかく気分よく歌ってるんだから」

久しぶりにおもいきり家事をやった。なんだかウキウキしているわたしに部屋の中も騒がしくなっている。

「なんかいいことでもあったのかしらね？」

「さーて、どうかしらねー」

化粧道具たちはこそこそと噂話をしている。かぼちゃが馬車に変わる瞬間、これは恋の魔法？それとも天使のキス？

夢見る少女の出来上がり！ってわたし、何うかれてんだろー……見事にメイクが決まった。こういう日は何かいいことあるかもしれない。

「[涙の数だけ女は強く、美しくなるの](#)」

季節外れの冬の蝶々。冬の空がこんなに気持ちがいいだなんて、誰も教えてくれなかった。

「さて、いきますか！」

季節外れの冬の蝶々。冬の空に独りぼっち。誰かに捕まえて欲しいのに。

## [岡本真夜「TOMORROW」](#)

作詞 岡本真夜/真名杏樹

作曲 岡本真夜

唄 岡本真夜

恋したっていいじゃない

---

### 恋したっていいじゃない！

今日のわたしはそんな気分だった。部屋を勢いよく飛び出し、街の中に飛び出した。ついこの前まで疎ましく思えたクリスマスモードの町並みはわたしにも楽しげに見えた。

こんな日は素敵な洋服に出会えるかもしれない。行きつけのブティックをあれこれ見て回る。財布の紐がゆるくなる。「お願いワタシを買って行って」ワゴンセールに出されたかわいいアクセサリーたちがわたしを見つめる。「ワタシあなたに着て欲しいの」店の中の洋服たちがいっせいにわたしに声をかけてくる。

恋したっていいじゃない！

いつかきっと、あなたたちの力を借りて、わたしは素敵な人に出会うの。でもそうね。アナタは少し前のわたしには似合ったかもしれないけど、今のわたしには必要ないわ。あー、見つけた！アナタ、今日のわたしの気分にぴったりよ。

店の中に流れる音楽は、すべてわたしのために選曲されたみたいに心躍らせる。「OKいい？ つぎのリクエストはね。ノリノリのあの曲にして頂戴！わたしの横で楽しげに買い物をしているカップルにプレゼントするわ」

### 恋したっていいじゃない！

ときは誰の上にも平等に流れていく。早く感じたり遅く感じたりすることはあっても、それはあなたがそう思うだけ。わたしがそう思うだけ。過去を振り返るのも前を向いて歩くのも、それはあなたの、そしてわたしの自由。爪先立ちで背伸びをして少しばかり遠くを眺めてみれば、目の前のつまらないことに心捕われることなんかないんだよーやさしいあの歌は、わたしにそう教えてくれたっけ？

両手に荷物を一杯持ったわたしは、さながら友達に荷物を持たされてトイレの前で待っているようだった。そんなわたしをあなたはー彼は見つけてくれた。

「やー、すごい荷物だね。友達と一緒にかい？」

神様、いや、仏様、いや、大明神様.....わたし、どうしたらいいんでしょうか？

「いえー、これは、あの一、全部あたしの荷物で.....」

彼は優しくわたしに微笑んでくれた。

「キミは力持ちなのか、それとも……無鉄砲なのかな？」

今日の日を忘れない。彼のあの笑顔を忘れることなんかできない。

「あ、あの一、この間は……ありがとうございました。わたしぜんぜん気付いてなくて」

駅前の交差点。信号が青に変わろうとしている——お願いもう少しだけ時間を頂戴。

「ははあ、調子に乗って買い過ぎちゃいました」

ちがう、そうじゃない、他に何か言う事があるでしょう！もう、どうしよう、信号がかわっちゃう。彼の視線が信号機へ写った。

「なんかいいことでもあったのかな？キミ、この町の人？」

「いえ、えーとでも、もう5～6年になります。ここに住んでから……」

「この辺にコーヒーの専門店とかあるかなあ？引っ越してきたばかりで、まだよくわからないんだ。豆を切らしちゃって……」

わたしには心当たりがなかった。インスタントコーヒーしか飲まないわたしには、豆のことなどわかるはずもなかった。

「ごめんなさい、わたし、インスタントしか飲まないから……」

あっダメ、信号変わっちゃったよ

「そう……へんなこと聞いちゃったね。じゃあ」

彼は人波に少し遅れて交差点を渡しだした。わたしはまるで動く事ができない。追いかけるなきゃ、追いかけないと……お願い振り向いて

### 恋したっていいじゃない！

「あの一、よかったら一緒に探しませんか？」

わたしはとうとう一歩前に出た。フラフラとよろめきながらも、クラクラになりながらも、それでもわたしは一歩前に踏み出した。彼の大きな背中めがけて……

### 『恋したっていいじゃない』

作詞：渡辺美里 作曲：伊秩弘将 歌：渡辺美里

「いいのかなあ、つきあわせちゃって」

彼は振り向いてくれた。わたしは一生懸命に彼を追いかけた。

「いいんです。その……この前のお礼もしたいし」

彼はわたしの少し前を歩きながら、振り向き加減でわたしに話しかけてくれた。

「あー、あの時は、そうだね。逆に恥ずかしい思いさせちゃったかな」

覚えていてくれた。それだけでわたしには十分だった。二人にとって本当に一瞬の出会いだったけど、わたしには彼を忘れられない理由があった。彼はわたしが高校生のときに憧れた先輩にそっくりだったのだ。憧れて、恋をして、そして別れた先輩……でも、彼がわたしを覚えていてくれたなんて、それは軌跡のようなものだと、その時は思った。

「あー、そんなの、ぜんぜんいいんです。あのまま家の鏡を見るまで気付かなかっただらと思うと……あ、あの一、心当たりはあるんです。コーヒーわたしはあまり詳しくはないんですけど、たぶんわかると思います。こっちです」

今にして思えば、まったく、一体全体すっかり舞い上がってしまい、まるで十代の少女のようだったと、顔を赤らめるばかり……

駅から線路沿いに5分ほど歩いたところに良く立ち寄る喫茶店があった。そのマスターとは気兼ねなく話せる仲だったので、わたしはマスターに聞けばわかると思った。彼を店の外で待たせて事情を話すとマスターは快くコーヒー専門店の場所を教えてくれた。運良くと言えるのかどうか、それはここから15分ほど歩く場所にある。15分……あと15分は彼と一緒にいれる。

「えーと、ちょっとここから離れてるんですけど、ちょっとわかりづらいところにあるから、わたし案内しますね」

彼は恐縮した顔をして最初は遠慮をした。それでもわたしは半ば強引に彼を連れて歩き出した。正直わたしも何がなんだかわからなくなっていた。どうしてここまで積極的になれるのか……どうして素直に気持ちを出せるのか？

「ボクは先月勤め先で急な移動があってね。ついこの前までは名古屋に住んでいたんだよ。単身赴任ってやつさ」

わたしは息が止まりそうになった。街の雑踏がわたしを包み、近づいた彼の背中が急に遠くに見えてしまった。

「あ、それは、たいへんですね、奥様とか、心配されているでしょう」

今にして思えば、よくもそんな言葉ができてたものだと、私自身を褒めてやりたい気分になる

。

「まあ、なんというか、そうなんだけど、そうでもないというか……あれ、なんか変な話になっちゃったね」

わたしの頭の中でいろんな言葉がグルグルと回り出した。単身赴任、奥様、名古屋、そうなんだけど、そうでもない……

「ああ、持とうか？いやじゃなかったら……荷物」

わたしはとっさにいたたまれなくなり、混乱し、取り乱してしまった。

「あ、あの……すみません、わたし、あの一、本当にごめんなさい」

わたしは駆け出していた。どこをどう走ったのかわからない。恥ずかしくて、つらくて、情けなくて、ワケわかんなくて、せつなくて……たぶん彼はわたしの背中越しに何か呼びかけてくれたようだった。でもそんな声わたしの耳には届かない。わたしの心には届かない。

気が付くとわたしは部屋のドアを閉めてドアにもたれながらひとり泣いていた。

「何やってるんだろうわたし。わたし何やってるんだろう。わたし、わたし……」

昨日一晩、泣き明かしたはずの涙が今にもこぼれ出しそうになった。

『慟哭』 工藤静香

作詞 中島みゆき

作曲 後藤次利

唄 工藤静香

## Return to Myself

---

「どうしたの？浮かない顔して……あんなに元気いっぱいに出ていったのに」

玄関に置き去りにされたブーツがわたしに恨み言を言う。

「ワタシと一緒にいたら、きっといいことあっただろうに」

「うるさい！なんでもないわよ！」

あまりにも苦しい言い逃れにわたし自身も腰が砕けそうになった。

「なんでもないんだから。本当に……」

わたしはヒールを脱ぎ捨てて、買い物袋をテーブルの上に投げ出してその場にしゃがみこんだ

。

「こんなはずじゃなかったのに……」

何が？何がこんなはずじゃなかったの？

「ワタシ、彼は素敵だと思うわ」

テーブルの上の買ったばかりのアクセサリーが袋の中から声を揚げる。

「そうよ。何も置いてけぼりにすることはなかったわね。少なくとも彼には何の責任もないわ」

洋服たちまで騒ぎ出した。

「まだ間に合う。まだ、間に合うよ」

壁にかけた時計が、わたしを諭すように繰り返す。

「まだ、間に合う？まだ、間に合うの？」

わたしはテーブルの上のティッシュを二枚とると思い切り鼻をかみ、そしておもいきり顔を二回パン！パーン！と両手で叩いた。

「まだ間に合う！」

いないかもしれない。いるはずなんかない。でも、もしいたら。もし待っていてくれるのなら……わたしは駆けていた。彼と別れたあの場所へ急がなきゃ。家から駅までは10分、多分駆け足で来たから7～8分くらい経つことになる。今から急いでも、やはり20分近く経つことになる――お願い、彼にもう一度合わせて――わたしは心の中で何度も叫んでいた。

狭い路地から駅へと続く広い通りへと出ると夕方のこの時間、さすがに人通りが多くなっている――まっすぐに走ることはできない――もどかしい。ダメ！こんなじゃ間に合わない！

「あー、キミー！」

駅へと向かうワタシの背中に向かって誰かが声をかけたような……まさか、そんなことが。わたしは振り向いた。どこ？どこにいるの？

「こっちだよー！」

通りの反対側から声がする。あの低くて心の底に響く声――そこには屈託のない笑顔で大きな

手を振る、彼の姿があった。彼は車を避けて道路を渡りわたしに駆け寄ってきた。

「えー、どうして？」

思わずそう口走ってしまったわたしに彼は右手で頭をかき、困ったような顔をしながらこう言った。

「あー、えーと、それは、その一、こっちの話で……いったいどうしたんだい？急に部屋にカギをかけてきたかどうか、心配にでもなったのかい？」

「あー、あの一、ゴメンなさい、本当に、ゴメンなさい……」

わたしは多分真っ赤な顔をしながら、平謝りに謝って、そして、でも心の中ではずっと「ありがとう」って言っていた。それは彼に対してなのか、神様に対してなのか、部屋の中のやかましい同居人に対してなのかわからない。でも、わたしはすごくハッピーだった。

「いやー、いいんだよ。そんなに誤らなくても……まあ、この辺を歩いていれば、店も見つかるかなあと思って……」

そんな軌跡は起きないと思う。多分彼は、わたしの後を追って近くまで来て、そして見失ってしまった……でも何のために？まさか、わたしを探すために？

わたしには、そんなことを彼に聞く資格はなかった。わたしは彼を置き去りにして、逃げてきてしまったのだから……それからわたしたちはマスターから教えてもらった店に向かった。店に着くまでの間のことは、あまり覚えていない。どんな仕事をしているとか、慣れない土地での一人暮らしは大変だとか、どこのスーパーがいつ特売をやっているかとか、そんな話をしたと思う。

「あの一、また、お会いできますか？」

彼が10分ほど店の人とコーヒーについてのやり取りをし——わたしには、コーヒーのことはちんぷんかんぷん——目的のコーヒーを手に入れ、店の前で別れようというとき、わたしは思い切って切り出した。

「そうだね。この店を教えてくれたマスターにもお礼を言いたいから、来週あの店で……そう、このくらいの時間に待ち合わせっていうのはどうかな？」

彼は一度腕時計を見て、その時計をわたしに見せた。時計の針は——「4時半……ですか」彼はにっこりとわらい、そして少しばかり慌てた様子だった。

「あー、まずい、布団干しっぱなしなんだ。早く取り込まないと……じゃあ、また来週に」

あー、どうしよう。名前も連絡先も聞いていない……でも不思議と心配はなかった。

「きっとまた、会える……」

ともかくわたしは、[自分らしさを取り戻した](#)。あの日、先輩と……あの人と別れてから、恋に臆病になっていたわたしは、重たい荷物を投げ捨てて、彼の胸に飛び込んだ。

冬の暖かな陽射しは、翳りだすとあっという間に暮れてしまい街は肌にさすような冷気に包まれる。でも、なぜだろう。今は少しも寒く感じない。

「あ、いけない！わたしも洗濯物を取り込まないと」

わたしは再び駆け出した。無我夢中で逃げ出し、不安にかられながら追いかけ、そして今、自分自身のために、わたしはわたしに向かって走り出した。

『Return to Myself』

作詞：浜田麻里 作曲：大槻啓之 唄：浜田麻里

一週間……楽しく過ごしている間はあっという間に過ぎてしまう。でも何かを待つにはあまりにも長い時間。わたしはただただ、時間が早く立つことを祈っていた。こんなに何かを待ちどうしいと思ったのはいつ依頼だろうか——彼に会いたい思いを抑えようと、わたしは恋に臆病になっていたわたし自身と向き合うしかなかった。もう二度と彼の前から逃げたりはしない。

あの日、わたしは誰かを好きになることをとても後悔した。別れがこんなに辛いとは、別れがこんなに悲しいとは、別れがこんなに悲しいとは、別れがこんなに切ないとは——人は愛ゆえに苦しむ、人は愛ゆえに悲しむ。そんなことを本気で思っていた。だからわたしは——だからわたしは恋に臆病になった。

中学のとき、わたしはバスケットボールをしていた。男子は学区内でそこそこの強さだったが、女子チームはわたしが在学中、一度も公式戦で勝つことはできなかった。みんな仲のいい友達だったけど、高校はバラバラになった。わたしは高校に入学すると早速バスケ部に入部しようと見学に行ったが、あまりのレベルの違いに圧倒され、入部するかどうかわかっていた。

スポーツしてた人が、急に運動しなくなると太るらしいわよ——あれは入学してすぐに仲良くなったミッコの言葉だった。わたしはそれが嫌で、何でもいいから運動部に入ろうと思った。不純な理由だった。

個人競技ならチームメイトに迷惑かけたりしないでできるかも！

わたしの安易な発想とそのときの陸上部の事情が見事に合致した。我が陸上部は慢性的に人手不足。特に目立った成績も残せず、運動系のクラブの中でも御荷物扱いのクラブだとそのときの部長が言っていたのだから間違いないだろう。見学に行ったわたしに一生懸命に勧誘する部長の熱意も会ったのだが、一人グラウンドで黙々と練習をするあの人——先輩の姿にわたしは心引かれた。

入ります。わたし陸上部に入ります。

不純な理由に更に不純な理由が重なり、わたしは陸上部に入ることを決めた。そうなのだ。わたしは元来惚れっぼいのだ。

先輩は我が御荷物陸上部のエース。もともと陸上の経験がある人ではなかったのだが、友人とほんの付き合いでこの部に入部したらしい。ところがその友人が交通事故で亡くなり、それをきっかけに友人の志を継いで陸上に打ち込むようになったという、それはそれはまるで少女漫画に

出てくる主人公のような設定の先輩だった。

もちろんこれには「尾ひれはひれ」がついていて、交通事故は本当だが命に別状のある怪我でもなければ、選手生命に影響があるほどのものでもなかったらしい。用はそれをきっかけに練習をサボり、幽霊部員になったことを幽霊＝死亡と部長が「おひれ」、副部長が「はひれ」をつけたというのが本当のところらしいのだが、あの人はその話を否定はしなかった。

だってオレがやめたら御荷物どころか本当に廃部になっちゃう。自分が潰したと部長あたりが言いふらすのが嫌だからオレは一生懸命練習しているんだと、そんな話を聞いたのはあの人と付き合ってからすぐのことだった。

付き合ってからしばらくは、平穏で緩やかで、てもあつという間の素敵な時間が過ぎていった。でも、別れはすぐにやってきた。彼は卒業と同時に札幌の大学に行くことになった。[遠距離恋愛はもの見事に――それこそドラマや歌の歌詞のように破局した](#)。尾ひれはひれがつく余地もないくらい。

わたしはあの人に繋がるすべてを否定した。不純なわたし、惚れっぽいわたし、そしてあの人  
の面影を感じさせるもの全て……でも、時々抑えられなくなる気持ち。本当にこれでいいの？  
わたしは……わたしは、誰かを好きになれるの？愛せるの？

だからわたしは、あの人とはちがう、弟みたいなあいつに自分を振り向かせようとしていた。  
自分からはいかない。自分からは誘わない。わたしが好きになるんじゃない。あいつが好きになるの。  
わたしが愛するんじゃない。わたしが愛されるの。

でも、気付いていた。それは本当にわたしが望んでいることじゃないと。

彼との約束の日までの間、わたしはわたしと向き合い。いくつ物言葉を交わした。もう逃げない。もう逃げ出さない。それを[女の意地](#)といえ……そうなのかもしれない。

[『LAT.43°』](#)

[作詞・作曲:吉田美和 唄: DREAMS COME TRUE](#)

[『PRIDE』](#)

[作詞・作曲:布袋寅泰 唄: 今井美樹](#)

その店はわたしがこの街に住むようになってから、最初に見つけた素敵な出会いだった。初めての一人暮らし、初めての街、初めての独りぼっち。重い荷物を全て捨てて、心機一転、新しい人生の始まり。

大学の同級生がこの街に住んでいたことが一番の理由だったけど、正直家を出ればどこでもよかった。飛び出してみたものの、女の一人暮らしというのは、自分が思い描いていたものとはかけ離れていた。夜が怖い。朝が憂鬱。休みの日には居場所がない。入社して最初の一月はなんとか自炊をしていたけど、同期の仲間と親交が深まると、夜はほとんど外食になった。わたしの料理のスキルはその時点で止まってしまった。

わたしが休日の居場所を見つけたのは、退屈しのぎの小説を買ってみたものの、家で一人で読むのはどうにも落ち着かず……というより、ついついごろ寝をしてしまい、ちっとも先に進まないで、思い切って落ち着いて本が読めるような喫茶店を探そうと外に出た。ちがうか——東京の夏は暑い。家に居ては電気代がいくら掛かるか恐ろしくなったというのが、本当の理由かも。

宛てはあった。帰り道、本屋に寄り道をするとその店の前を通ることになる。多分かなり古い喫茶店だろう。きっと常連さんばかりで、女のわたしが一人でというのはちょっと気が引ける……だけどチェーン店は表通りであって、外から丸見えなのがどうも気になる。思い切って入ってみよう。かなりの覚悟で土曜の午後、わたしは1冊の本を持ってその喫茶店に入ってみることにした。

AntiquesMelidyと書かれた小さな看板がドアにかけられている。ドアを開けるとドアにつけられたベルの音がチリーン、チリーンと店内に鳴り響く。木目調のカウンターテーブルの奥から「いらっしゃいませー」となんとも品のいい声でわたしを迎え入れてくれたのは、50代後半か60歳くらいの、それはそれは絵に書いたようなマスターだった。

嘘みたい

これがわたしの正直な感想だった。

その店はまるで……まるである年代から時間が止まってしまったかのような空間、現代のおとぎ話とでも言うべきか、わたしは一瞬後悔した。

「どうぞ、空いている席に」

多分マスターは笑顔でそうってくれたのだと思うけど、マスターの目じりは、普通にしているでもまるで微笑んでいるようにしか見えない——まるで仙人のようだった。

わたしは促されるままテーブルの空いている席に座った。

なんだろう？この落ち着く感じ。

わたしはブレンドを注文し、それから2時間あまり、その店で本を読みふけた。それからほぼ毎週、わたしはこの店で本を読むために本を買い、予定のない土曜の午後はここで過ごすようになった。

わたしにはコーヒーの味はわからない。でも、きっとこの店のコーヒーにはなにか特別な拘りがあるのだろうとは容易に想像ができた。そして今、わたしはこの店であの人を待っている。まるで少女のように怯えながら……

## 微笑返し

---

「やあ、待たせたかったかな？」

ドアのベルと共に彼が現れた。彼の笑顔がまぶしい。わたしは席から立ち上がってお決まりの文句――さっき、来たばかりですから――といって彼を席に招き入れた。どこか社交礼儀、ちっともわたしらしくない。次の言葉が見つからない。あー、わたし、なんで準備していなかったんだろう。

「コーヒー飲んでるの？ブレンド？」

正直少し慌てた。社交礼儀的な会話のデータベースにこの会話の展開は登録していなかった。

「はい、いつも、これなんです」

彼は一段と屈託のない笑みを浮かべながらお冷を持ってきてくれたマスターに声をかけた。

「ボクもブレンドをお願いします」

「はい、かしこまりました」

わたしは少し後悔し始めていた。わたしはわたしの場所に彼を呼び込んでしまったのだ。マスターに対してもどこか気恥ずかしさがこみ上げてきていた。

「この店にはよく来るのかい？」

大丈夫。この話題は想定内。

「週末は時々、ここで本読んだりして……なんか落ち着くんですね。この店。コーヒーのこととかはよくわかんないんですけど、たぶん、チェーン店なんかよりはおいしいんじゃないかなあって」

「うん、最近はこういう個人経営の喫茶店が減ってきたからね。ボクは学生時代はこういう店に入り浸ってね。そこで仲良くなったマスターにコーヒーのことやお酒のことをいろいろと教わったよ」

彼はお冷と一緒に出されたタオルで手を拭きながら、ゆっくりと、丁寧に、どこか遠い昔に思いをはせるような目をしながらわたしに語りかけてくれた。

好きだ

わたしはもうすっかり観念した。わたしはこの人が好きだ。たった数分しかたっていないのにわたしはそれを確信した。

わたしが彼に見蕩れているうちにマスターが彼のブレンドを持ってきてくれた。彼はまるでためらうことなくマスターに話しかけた。

「あの一、実はこの前、彼女にコーヒーの豆を扱っているお店を知っていたら教えてくださいっ

てお願いしたの、実はボクなんです」

「あー、そうでしたかぁ」

「えー、いいお店を紹介してくれました。おかげでいい豆が手に入りました」

「あー、それはよかったですね。あの店の主人はわたしの古くからの友人でしてねえ。それはよかった」

「いえー、今日はそれで、マスターにお礼が言いたくて伺ったんです。ありがとうございました」

「それはわざわざ、どうぞごゆっくりしてってください」

わたしは嫉妬した――えっ？何に？誰に？

わたしがマスターと話をしたのは、この店に通い始めて数ヶ月経ってからのことだった。わたしは彼に嫉妬している？

わたしはまだ、彼とまともな話はできていない。言葉一つ一つ選ぶのも苦労しているのに、マスターと彼はまるで旧知の仲のように打ち解けている。わたしマスターに嫉妬している？

彼は出されたコーヒーをそれはそれは優雅に口に運びコーヒーの香りと風味を味わっていた。

「う〜ん。今日はいい日だ」

なんて素敵な声、なんて素敵な笑顔、どこまでも自然な立ち振る舞い。わたしはすっかり舞い上がりそうだった。

「そうですね。素敵な日ですね」

わたしは精一杯努力して、ようやくその言葉を見つけた。ようやくわたしの言葉が彼の中に溶け込んでいくのを感じることができた。少しずつ肩の力が抜けていった。わたしはたぶん、ようやく、自然に微笑むことができた。

彼と過ごした時間は、わたしがこれまで過ごしてきた時間とはまるで違う世界のようなようだった。二人の出会いは何かの運命のようだと、そんな会話をしたのは、出会った最初の頃だったか、それとも別れる前だったか.....

わたしが彼の胸に飛び込むのに、それほど時間はかからなかった、出会ってから、たった数分間で恋をし、恋に焦がれ、迷い、戸惑い、そしてもう、次の瞬間には彼の胸の中に抱かれていた。

わたしって、わたしって、こんなことができるんだ。

少し前までは想像できないような夢のような時間が過ぎてゆく。彼はわたしの全てを受け止めてくれる。初めてわたしのすべてをゆだねられる人に出会えた。それを幸せといわないのだとしたら.....

疑うことを知らない少女のように突然目の前に現れた王子様がいつでわたしを支えてくれると信じて、そして彼はそれに100%応えてくれた。

「年末は帰れないかなあ。ほら、ニュースでもやってるでしょう。2000年問題」

わたしは仕事が忙しいからと嘘の電話をして、年末は実家には帰らなかった。でも半分は本当だ。

その昔コンピュータがまだ一般の家庭に普及することなど遠い未来のことだと思われていた時代に西暦が1900年代から2000年代に入ることなど考える余裕などなかったのだ。Y2Kという言葉は今では誰も覚えていないかもしれないけど、彼が東京に出てきたのも、実はY2Kのおかげなのだということがわかったのは、彼の部屋に最初に泊まったときのことだった。

「ねえ、2000年問題って、実際どうなるかしらね。飛行機が落ちるとか、銀行の残高が0円になるとか言ってみんな騒いでるけど.....」

彼はわたしの口に人差し指を優しくあてがった。

「大丈夫だよ。2000年は、きっといい年になるさ。二人にとって」

彼の声、彼の瞳、彼の言葉、彼の匂い、彼の鼓動.....

たとえ2000年に世界が滅びるような事が起きても、彼がそばに居てくれたらそれでいい。それからまた二人は目を閉じて愛を確かめ合った。

今が一番幸せと思うわたしの心よりも、彼の心はもう少し先を見つめているんだあ

その時は、それがとてもうれしくて仕方がなかった。ふたりの愛を確かめ合えば確かめ合うほどに、わたしは彼のことを好きになっていった。

## 日曜の朝、コーヒーの香り

---

「ねえ、いつごろからコーヒーにこだわるようになったの？」

日曜の朝、彼の部屋で目覚めたワタシは、気持ちのいい冬の朝の空気を吸い込みながら彼の入れてくれたコーヒーから漂う湯気を目で追いながらたずねて見た。

「ないしょ」

彼は時々意地悪い笑みを浮かべながら、そうやってワタシをからかった。

「もう、いつもそうなんだからあ！」

わたしは口を尖らせながらも、いつになく機嫌がよかった。今日は二人で映画を見に行こうと約束していた。男の人と映画を見に行くのは……やめよう、もうずいぶん昔の話だ。

「実はわりと最近の話なんだ。身近にね、コーヒーに詳しい人がいてね、まあ、みようみまねでというか……」

わたしは直感的にその身近な人とは、彼の身近にいた女性のことだとわかってしまった。彼はそのことを隠そうとはしないけど、名言もしない。でも、どこかわかる。そういう話をした後の彼の表情は、どこか遠くを見るようなそんな寂しい目をしている。

「そっか。きっと素敵な人だったんでしょうね」

わたしは飛び切りの笑顔で、そして心からそう思った。でも、それは決して口に出して言うべきことではなかったのだと、その言葉を言い終わる前に後悔をした。

「あっ、えっと、そうじゃなくて、あっ、参ったなあ、もうわたしったら、何をいって……」

そういいかけたわたしの唇は、彼の唇によって塞がれた。わたしって悪い女なのかなあ。でも、彼は優しくわたしを包んでくれる。わたしを守ってくれる。わたしを抱いてくれる。

「さて、今日の気分はアクション映画？恋愛もの、それとも絶叫ホラー映画？」

「ダメダメ、ホラーはダメなんだから」

そういいながら、わたしは震えながら彼の腕にしがみついている自分を想像して、顔を赤らめていたいた。

「どうする？もう一杯飲むかい？」

彼はそういいながら台所へと歩き出した。

「ねえ、コーヒーのおいしい入れ方、教えて」

「うん、わかった」

彼はそういうとわたしの頭をやさしく撫でてくれた。

「もう、子供じゃないんだから」

わたしは彼の大きな手が好きでたまらなかった。彼の大きな手で頭を撫でられるのも、抱きしめられるのも好きでたまらなかった。

「おいで」

「うん」

彼の大きな手がわたしの手を握った。わたしはその手を強く握り返した。お願いもうわたしを離さないで、そう願うわたしの気持ちを悟ってか、彼はわたしの手を握ったまま台所へと歩いていった。狭い部屋の中で手お握って歩く二人。こんなんじゃダメなのだと思う気持ち。わたしは彼に守られながらゆらりゆらりと揺れていた。

恋愛物はダメ、もしもあなたが、あなたの身近だった人を思い出したりするのが怖い。わたしってズルい女なのかしら、でも、それでもいい。今、わたしは彼を失うことが何よりも怖い。わたしの心は震えていた。この幸せな時間を失うことを想像することは、何よりも恐ろしかった。不安に思えば思うほどに、わたしは彼に甘えるしかなかった。

もう、どうすることも、できなかった。

## 募る想い

---

幸せに感じれば感じるほど、彼を身近に感じれば感じるほど、ワタシはどうしようもなく不安になった。彼と会えないとき、気を紛らわすのにとっても苦労した。

「先輩、最近変ですよ」

きた、サッチンよ。どうしてこの子はこうもするどいかな？

「ないがよ、なにが？」

「だって先輩、最近ため息多いですよ。知ってます？人間ため息をつくたびに、なんだか逃げていくそうです？」

「お、おい、そのなんだからって言うの、なんなのよ？それを言うなら幸せが逃げてくださろうよ」

「さすが先輩！何でも知ってるー！で、先輩はどんな幸せを逃がしたんですか？」

し、しまった、完全にはめられた

「に、逃がしてなんかいないわい！」

「えー、じゃーもしかして今、幸せの真っ最中なんですか、ずるい、ずるい、私を差し置いて先輩だけ幸せになるなんて、約束が違うじゃないですか〜」

う、うん？いつそんな約束をしたっけ……っていうか、なんかすっかりバレバレな感じなんですけど

「わかった、わかったからもう勘弁してくれ、白状する。白状するからもう少し時間をおくれ、もうひとつのため息の理由を片付けちゃうからさ」

「もうひとつの理由って……あー、例のプロジェクトの話ですか。なんかいろいろとややこしいことになってるみたいですね。部長も頭抱えてるとか」

新年度に向けてWEBページを大幅にリニューアルする企業はたくさんある。わが社もそういったクライアントをたくさん抱えているのだが、中にはなかなか企画内容が固まらない案件もある。クライアントからすればWEBの製作など企業の様々な活動の中でも、まだまだ優先順位の低い分野である。これからはWEBの時代が来る。紙のパンフレットよりもWEBの商品説明力は圧倒的な情報の量と鮮度を送ることができる。しかしそれはその企業がどういう使い方をするか、また決済の必要な部署や手続きなど、今までのやり方と違う。WEBになんでそんなに予算がかけられるのかとか、専任の担当はつけられないとか、話が煮詰まってから社長の一言で一からやり直しなど、そういうことは日常茶飯事であったが、この年度末はまさにそのピークのようなものだった。

「わたしたちってさあ、結構最先端なことしてるのにさあ、相手の頭の中が旧式だとどうも話がかみ合わないのよねえ。流行に敏感な業界の企業と話をするときはまだしも、老舗とかなると、まあ、言葉一つ一つ説明しないとイケないし、大変なのよねえ」

「このまえなんかあ、ちゃんとページが表示されていないとか、クレームの電話がかかってきたんですけど、結局お客様の使っているブラウザの設定が悪くて……まあ、でもそれも、お客様が悪いかといえは、そんなことないですしねえ」

「おー、サッチンもだいぶ大人になったじゃん。前はすぐ『キィィー』とか『ビィエェエェン』といってわたしに泣きついてきてたのに」

「そりゃあ、もう、頼りになる先輩の一部始終を見てますから。お客様の対応の仕方も覚えますって」

おいおい、この子はずっとわたしのことを観察してるのか

「は、は、は、なんかこう、うれしいような怖いような話だね。それ、道理で最近背中に視線を感じるわけか」

「はい、先輩のことなら、何でも聞いてください。わたし何でも知ってますから」

「こ、こら！大人をからかうんじゃないよ」

「ははは、なんちゃてえ」

いや、正直バレバレだろうな。きっとデザイナーのアッコも気づいているけど、あの子は気を使って気づかないフリをしている。まあ、キヨミはそういうことには無関心かもしれないけど、キヨミは今まさにその厄介なクライアントの担当だけにそれどころじゃないだろう」

ありがとうね、サッチン

「わたし、みんなに甘えちゃってるのかなあ」

思わず口に出たその言葉を、誰かに聞かれたのではないかと周りを見渡すわたし。

はやく、彼に、会いたい

「ねえ、わたしのことどう思っている？」

そんなこと怖くて聞けなかった。わたしの期待通りの返事ならそれを信じられるのか、そうでなく、悲しい返事だったら、苦しみに耐えられるのか、わたしにはわからなかった。

「どうしたの？そんな顔して」

そんなことを考えていると、彼はわたしの顔を覗き込むようにして、そしてやさしく、意地悪そうな表情で微笑んでくれる。

「べーだ。どうせ そ・ん・な・顔ですよーだ」

彼はずるい。わたしにだってわかるんだから……最近特に気になるようになった。或いは本当に回数が多くなったのか、時間が長くなったのが、彼が時々遠くを見つめるような表情で、なにか考え事をしている。そんな彼を心配して……心配？なにを心配しているの？わたし……

「そんな顔をされると、益々好きになっちゃうだろう」

彼はずるい。わたしは…・・・わたしはもう、彼なしでは生きていけない。そんな気にさせられる。

「もう！いつもそうやって！」

「そうやって——なに？」

「もう！ズルいんだから！」

「そうだよ。ボクはズルい男——こんな素敵な女性を独り占めできるなんて、ズル以外のなんでもないよね」

「もう！だから、そういうのやめてよねー」

わたしは始めて彼とであったときのように真っ赤な顔をしていた。

「あの時も、そんな顔してたね」

「あー、そう、いつか聞こうと思ってたの。あのときキャベツを選びながら、『これしかない』とか言ってなかつたけ？あれ、どういう意味？」

彼はしばらく上のほうを見ながら——彼は何か思い出したり、するときに必ず腕を組みながら上のほうを見上げる。「あー、あれね。うん、あれはね——」そして照れくさいとき、彼は決まって右手で頭を書きながら話す。「——僕は、野菜炒めと焼きそばしか、料理できないんだよ」

彼と付き合うようになってから、ご飯は必ずわたしが作っていた。そして食事の後は必ずおいしいコーヒーを入れてくれる。

「えー、じゃー、毎日野菜炒めと焼きそば食べてたの？」

「流石に毎日じゃないけど、どうもコンビニの弁当って言うのは好きになれなくて」

確かに彼はしっかりしているようで、どこか生活感がない。いいところの坊ちゃんという感じではないが、身の回りの世話は家の人、やってくれていたというのはすぐにわかる……家の人、ご両親、そして前の……

「ねえ、今度、料理教えてあげようか」

わたしは自分がまた、何かを考えて不安な気持ちになるのがイヤで、思いついたことをそのまま口に出して言ってしまった。

「うん、あまりできのいい生徒じゃないけど、先生と呼ばせてもらうよ」

あっ、しまった！

わたし、そんな、人に料理を教えるなんてありえない。わ・た・しが人に料理を教えるなんて家族が知ったら、きっとひっくり返って笑うことだろう。

「ねえ、ちょっと、その先生とか言うのは……やめない？」

「やめないっ！先生、どうか、よろしくお願いします！」

「ねえ、もう、ちょっと～やめてよね～」

なにをやっているんだろう、わたし……わたし、いったい、なにを……

わたしは彼をわたしのものにしたかった。だから彼とも思い出を一杯作りたかったし、彼が料理や洗濯といった身の回りの事が苦手なら、それを教えてあげることで、彼を自分の色に染めることができるような気がしていた。だから2人で映画を観たときも、サントラのCDを買って彼の部屋で2人で聴いた。スティーブン・タイラーのバラードは、2人の思い出の曲になったし、『アルマゲドン』は今まで見た映画の中で一番好きな映画になった。

## きみの朝

---

命一杯彼に甘えた次の日の朝、春を目の前に急に冷え込んだりするの、それはそれで季節感があつてわたしは嫌いじゃない。だって寒いことを理由にわたしは朝から彼にしがみつき、思いっきり甘える事が許されるのだから。

横たわる彼の顔に朝の光が射しがさしている

彼の過去の重さって、いったいどんなものなんだろう？

そう考えずにはいられなかった。でも、そのことを彼に直接聞くことはできなかった。

怖かった。

でも、いつか、それはわたしの前に現実として落ちてくるのだろう。そしてその日はそう遠くはないとわたしの中の何かがザワザワと騒ぎ立てる。

別れようとする魂と出会おうとする魂

わたしたちの出会いは、別の別れを意味するのかしら、それとも……

誰の上にも朝は訪れる。それが悲しい一日の始まりなのか、素敵な一日の始まりなのか、出会いがあるのか、別れがあるのか

「寝坊スケさん、朝ですよ」

彼の耳元でささやく。

「モーニン、モーニン、きみの朝だよー」

「懐かしいね、その歌、もう、20年くらい前になるのか」

「そうね、わたしはまだ小学校の低学年だったかなあ、確かこれ、金八先生の後だったよね」

「うん、確かにこれを歌った岸田聡史はそのドラマに出てたけど、『きみの朝』は、他のドラマの挿入歌だったんだよ」

「えー、そうだったっけ？よく覚えてるね」

「まあね、なんというか、思い出の曲だったから」

わたしは一瞬はっとした——『へえ、どんな思い出？』と聞こうと思って、わたしはその言葉を飲み込んでしまった。

「わたし、マッチ好きだったなあ」

だって、聞くのが怖かった。わたしと彼の間には、まだ思い出の曲と言えるものは1曲しかない。思い出の曲……そこには必ず恋愛の、それもどちらかといえば甘酸っぱい思い出が詰まっ

ているものだ。でも、今はまだ、彼の過去まで含めて、全てを受け止める自身がなかった。ちがう、そんな遠い思い出話じゃないの。だって彼の向こう側には、常に誰かの影が見えるもの。

「ボクは明菜派だったかな。さて、じゃあ、コーヒーでも入れようか」

「うん、お願い」

すれ違っているわけではない。お互いに何かを避けて、何かから逃げて、何かをごまかしている。そんな感覚に捕われるようになったのは、思い起こせばこの日を堺にだったかもしれない。

何か足音を立ててだんだん近づいてくる。だんだん近くなってくる。

## サイフォン

---

「それにしても不思議よね」

「不思議？何が？」

「だって不思議じゃない。こんなコーヒーメーカー見たことないもん」

「あー、これね。まあ、コーヒーメーカーっていうのとはちょっとちがうんだけど……」

「ふーん」

わたしは嘘をついている。コーヒーサイフォンのことは知っていた。わたしが不思議に思ったのは、ろくに料理もしない彼が、コーヒーの入れ方にこれだけのこだわりをもっていることだった。

「コーヒーサイフォンってなんか理科の実験みたいね」

「まあ、なんというか、茶道みたいな？」

「え？茶道？」

「うん、茶道。たかがコーヒーだけど、されどコーヒーみたいな」

「ふーん。わたしなんかインスタントとドリップの区別もつかないけどなあ」

「区別っていうか、味そのものが問題じゃないんだ」

「え？じゃあー香りとか？」

「まあ、厳密にはもちろん、味も香りも、口当たりも全然違うもんだけど、こうやってコーヒーを入れる、一つ一つの工程を楽しんでいるというか……うまくいえないけど」

「うまく言ってよ」

わたしはたまにとても意地悪なことを言う。そしてそんな時はきっと、本当に意地の悪い顔をしているに違いない。それを行っていたのはサッチンだったか、アッコだったか……

「そうだなあ。ついつい一人暮らしだと、生活の面倒なことは省略しがちになるじゃない。

『まあ、自分だけだから』とか『誰も見てないからいいか』みたいな」

「あー、それわかるわかる。わたしも一人暮らし初めてすぐの頃とはいろんなことをショートカットするようになったかも」

「うん、そうなんだよ。だからこうして、コーヒー一杯を飲むのにある程度手間をかけることで、そうならないようにするっていうか、流されないようにするっていうか」

「へー、なんだか哲学的？」

「哲学的って言うよりかは、戒め？」

彼はわたしと話をしながらもサイフォンの準備を手早く進める。それはまるで15歳の少女が、憧れの化学の教師と話がしたくて、授業が始まる前に理科準備室に入り込んで忙しそうに次の授業の実験の準備をしている教師を眺めているような、そんな光景だった。

「アルコールランプって、なんか素敵ね」

「そうだね。ガスの炎は強いからね。ランプの炎はろうそくの炎ほど宗教的じゃないところがいね」

「また、難しいこと言うんだからぁ……」

「そうかい？だってほら、ろうそくといったら、教会だったり、お寺だったり想像しない？」

「えー、普通は誕生ケーキとか、クリスマスケーキじゃない？」

「なんでも食べ物なんだね」

「もう！」

アルコールランプに温められた湯気が立ち上り、暖められたお湯がロートまで上がり、コーヒーの香りが寝ぼけた鼻を刺激して目を覚ませる。

「何度見ても飽きないよね」

「そうだね」

静かなときが流れる。二人の間を流れていく。同じ場所で、同じ時間を過ごしている。でも、どうしてこんなに不安になるの？どうしてあなたは遠くを見つめているの？

幸せな時間を過ごしながらも、わたしの頭の中には寂しげな音楽が流れていた。

何がいけないのか……ちがう、何を恐れているのか、それも嘘、だって本当はわかっている。

誰かを好きになるってことは、その人の今、ともに過ごす未来、そしてそれまでの相手が過ごしてきた時間をすべて受け止めること、ううん、そんな理屈っぽいことじゃなくて、もっと感覚的な、空間的なことよ。

自問自答する毎日

「明日こそは聞いてみよう」

そう思っっては、それをなし得ず、思いはつものる。

「ねえ、どんな人だったの前の……」

その後続く言葉が出てこない。頭の中で何度も解析し、何度もシミュレーションをする。

多分もう、別れているのだと思う。だって彼はめいいっぱいわたしを愛してくれている。それは疑いようのない事実。でも……

ここにいる彼は、彼の全てじゃない。きっと彼のある一部分だけか、又はその逆にある一部分だけが欠けている状態、本当の彼は、今ここにはいない。

頭ではわかっている。ちがう、そうじゃなくて、わかってない。これは勝手な想像だもの、でも、それも違う。だってきっとそうに違いないんだから。ぐるぐる回っている。ぐらぐらと揺れている。

女になりきれないでいるわたし、いつまでも恋する乙女じゃいられない……

外は雨、降りしきる雨に打たれる紫陽花を眺めながら、ぼんやりとそんなことを考えていた。

「お待たせしました！先輩！」

小さな身体に不釣り合いな男物の大きな黒い傘をさしたサッチンが店の中から出てきた。

「紫陽花、きれいですね。でもわたし紫陽花って好きじゃないなあ、だって『移り気』『高慢』『辛抱強い愛情』『元気な女性』『あなたは美しいが冷淡だ』『無情』『浮気』『自慢家』『変節』『あなたは冷たい』ですよ」

「な、なによそれ」

「紫陽花の花言葉です」

「い、いや、そうじゃなくて、あんたなんでそんなこと暗記してんのよ」

「さて、なんででしょう？」

クライアントとの打ち合わせの後、サッチンと喫茶店に入って少し遅めのランチを食べた。感じのいい店のママの手作り感たっぷりのミートドリアセットは、散々だった打ち合わせ内容と憂鬱な雨に打ちひしがれた女子2名の心を癒してくれた。

「ふ〜むう、そうね……さては心無い男子に紫陽花でも送られた事があったり？」

「す、すご〜い、先輩するどい！」

「ははは、伊達に30年近く女をやってないわよ」

サッチンとの不毛で自虐的な会話は、もはやわたしにとって、なくてはならない存在になっていた。

「ついでに言わせてもらおうと、サッチン、その男物の傘、お主、まさか彼氏の部屋から会社に直行か？」

「え、え——、先輩なんでそんなことわかるんですか？後生です、どうかこのことは誰にも言わないでくださいませ、なんでも言うことを聞きますから」

「ほー、そうか、そうか、ならば今晚付き合え、昨日どんなことがあったのか、根掘り葉掘り聞いてやる」

ミイラ取りがミイラになる——そんな絵に描いたような体験をすることになるのはその日の夜のことだった。

「……って言うわけなんですよ。酷いでしょう！先輩もそういう経験ありますうー？」

飲み始めて30分もしないうちに話題をこっちに切り返されてしまった。

「流石に紫陽花を送られたことはないわよ。だいたい花なんか贈られたことあったっけなあ？」

それは本当にそうなのだ。思い返せば案外とありそうでない話。男の子に花を贈られたこともなければ、恋敵に嫌がらせをされたこともない。基本自爆だ。

「先輩は学生の頃って、どんな種類の猫の皮を被っていたんですかあ？」

「そりゃ、かわいい、かわいって、オイ！被っていること前提かよ」

「きっと先輩って男の子からだけじゃなくて、女の子からも持てたタイプじゃないですか。ワタシみたいなかわいい後輩からチョコレートもらったりとか」

「あ、あのねえ～、何をそのまるで見てきたかのような言い草は、それにその『ワタシみたいな』ってところ、ちゃっかりしてるなあ、もう、サッチンは！」

「あ、でたでた！先輩のもお～が」

「こらこら、大人をからかうんじゃ……」

「きゃはははは、先輩次何飲みます？」

「あ、えーっと、じゃあピーチフィズ」

すっかりサッチンのペースだ。もうこりゃ、白状させられるまで時間の問題だなあ。

「ねえ、サッチン、結婚とか考えたことある？」

「えー、何ですかいきなり、わたしどんなに好きでも先輩とは結婚できませんよ」

「おいおい、誰がお主にプロポーズするねん！」

「はは、まあ、そうですねえ、ないこともないですけど、そういうのはたぶん、びびびーっとくるのかなあと」

「びびび？」

「そうです、こう、ひらめきの電球が頭の上に点滅するみたいな感じです」

実にサッチンらしい表現だけど、なるほどそれは当たっているかもしれない。

「つまり、頭で考えるより、心で感じるみたいなの？」

「というか、子宮で感じるみたいなんじゃないですかね」

「おー、参った、参ったよ～。で、今付き合っている彼氏っていうのは、どうなのさ？」

「帯に短したすきに流しって感じですかね」

「ほー、その心は？」

「えーっと、よくわかんないです！」

最高の笑顔でそうこたえるサッチンを見ていると恋やら男やらで悩む事が馬鹿馬鹿しく感じてくる。

「先輩が男の子とで悩むってことは、よっぽどのことですね。不倫ですか？」

「ぎゃー————！お、お主、まさか盗聴器とか仕掛けてないだろうな」

「盗聴器なんてそんな無粋なものは必要ありません。わたしの透視能力は先輩のことなら何でもお見通しです」

「わわわわわ、参った。参ったからこれ以上いじめないでおくれ～」

「そうはいきません。今日という今日は洗いざらい白状していただきますよ」

「お願いします。なんでも言うことを聞きますから、どうか堪忍を～」

「ならば、これから話すワラワの愚痴を黙って聞いてくれるか、そして他言無用を誓うか」

「誓います、誓いますとも」

「よし、素直でよろしい……へへへえ、先輩、聞いてくださいよ～、彼ったら……」

それから2時間近く、サッチンの彼氏に対する愚痴と、とても人には言えないような恋人同士の営みについての疑問やら不満やらをたくさん聞かされた。女の子同士というのは得てしてこういう話でこっそりと盛り上がっていることを、世の男子はあまり知らないだろうが、それこそ10年の恋も冷めてしまうような話ばかりである。

「……というわけで先輩、先輩も話したくなったらいつでも声をかけてください。が一っとしゃべってしまえば、案外と楽になりますよ」

「うん、そうだね、でも、本当、今日は良かったよ。サッチンのあんなことやこんな事が聞けて」

「あー、あー、わかってると思いますが、このことを誰かに漏らすと、3分以内に先輩の全てのライフライン、ネットワークが切断されて、1時間後には全ての生活の記録がこの世から抹殺されますので、そこのところ宜しくです」

「は、ははは、どっかで聞いたセリフだな」

「でも、一つだけ言わせてもらえば、不倫は不倫ですよ。あまり何とかしようとか、どうしようとか考えないほうがいいかと、その一、出口のない迷路みたいなものだって……スイマセン生意気言っちゃって」

「ううん、ありがとう。わたしも頭じゃわかってるんだ。あとは気持ちの問題というか」

わたしはその後の言葉を口には出さなかった。サッチンとお店の前で別れる。少し歩いて夜空を見上げると、そこにはきれいな三日月が浮かんでいた。そして思わずつぶやいた。

「それはきっと、覚悟の問題ね」

## 言い出せなくて

---

「ねえ、わたしたち、これからどうするの？」

たったそれだけのことなのに……でも、たったそれだけの事が、言い出せなかった。

言ってしまったらすべてが壊れてしまいそうだから、だから明日のことや来週のことなら話はあるけど、一年後、西暦2000年をどうんなところで迎えようとか、そういう話には、わたしもしなかったし、彼もしなかった。

まだ、いい。このままでいいの。

自分をごまかすことはいくらでもできると思った。でも初めて知った。他人をだますよりも、自分をだますほうが、はるかに忍耐が要ることだと。

ねえ、今日、これからどうする？

わたしの口癖は「もう～」から「ネエ……」に変わってきたけど、彼もそのことには触れなかった。

でもそれは、突然訪れた。なんの前触れもなく。突然に……

「聞いて、ほしい事が、あるんだけど……いいかな？」

「イヤッ！」

と心の中で叫んだけど、わたしは沈黙によって彼にYESと答えた。答えるしかなかった。

「僕たちは名古屋で学生の頃に知り合って、それでね、彼女が先に短大を卒業して、社会人になったんだ。僕は大学3年、彼女は東京の会社に就職した。こういうパターンって普通はそこで別れ話になるのかもしれないけど、でも僕等は2年間の長距離恋愛を乗り越えて結婚したんだ」

彼は一つ一つの言葉を確かめながら、ゆっくりと静かに語り始めた。

「ボクは名古屋の会社に就職。彼女は東京の会社を辞めて名古屋で一緒に暮らした。ずっと一緒に居られると思った。だけど人間って不思議だよ。一つ屋根の下に暮らし始めたら、急にギクシャクし始めちゃって、ボクはこの通り不器用だから、そういうのを紛らわす事ができなくてね。ただでさえ残業が多かったのに、より一層仕事に没頭してね。同じ家に住んでいてもほと

んど顔をあわせないような日々が続いたんだ」

彼は大きなため息を一つついてわたしを見つめた。彼にしては珍しく、自信なさ気で、まるで母親に自分がついていた嘘を告白する子供のようにだった。

「で、どうしたの？」

「うん、で、こうなった」

「え？」

「うまくいえないんだけど、いや、いえないんじゃないくてよくわからないんだ。自分の事が」

「わかるよ」

「え？」

「わたしもそうだもん。わたしも自分のことがよくわからない。よくわからないから不安になるし、イライラもするわ」

「そうか、そうなんだ」

それは会話というよりも、懺悔に近い気がしたし、相手に何かを求めているのではなく、自分の心に向き合い、それを言葉に出しているような感覚。同じ場所にいながら、時間軸がすっかりズレてすれ違いを繰り返しながら、階段の踊り場で鉢合わせしたような。『急』でいて、『静か』で、約束された調和の取れないゆらぎのような感覚。

「ねえ、前から聞こうと思っていたんだけど、コーヒーの入れ方を覚えたのって……」

「あれは誕生プレゼントだったんだ。結婚して最初の年の……でも使ったのはほんの数回だった。単身赴任が決まってこっちに来たとき、家から持ち出したものなんか衣類ぐらいしかなかったんだ。引っ越が片付いて落ち着いた頃に、荷物が届いてね。開けたらこいつが……正直、こたえたって言うか、別れのサインだと思ったんだ」

「それはきっとちがうと思うなあ」

と、言いかけて、でも言い出せなかった。そんなこと、いえるはずがない。

今日は、長い夜になりそうだ。

「道理でおかしいと思ったわあ。だって、コーヒーメーカーがすごいのに比べて、他のものは全然だものね」

「そうなんだ。僕は、なんというかそういうのは全然わからないし、うちの親も男子厨房に入らずってものの標本みたいなものだったし」

「『おーい、お茶！』っていうとお茶と灰皿と新聞が出てくるみたいなの？」

「ははは、まるで見たことのようにいうけど、本当にそんな感じだったんだよ」

「やーね、男って。いまだにそんなことが通用すると思ってるんだから、もう20世紀も終わりよ」

「あー、まー、そーなんだけどね。だからこそ、僕はこうして東京に出てきたし、そのお陰で君に会えた」

「何よそれ。2000年問題とわたしは並列で並べるような凶事や事故みたいなものなの？」

「あ、は、は、は、こりゃ一本とられたかな」

「あ、あのねえ、その旧世紀的な受け答え、若い子に嫌われるわよ」

「いいんだ、僕は若い子に嫌われようが、ただ一人だけ笑ってくれれば」

「もう、またそういうこと言って！」

二人の会話は、一見していつもと変わらないようだった。だけどわたしには違って思えた。違って感じられたし、今までとは違うものが見えた。それは手探りでお互いの距離を測ってきた二人が、互いの場所を確認し合い、そしてお互いがどの方向を見ているのか、そしてどの方向に向かおうとしているのかを、互いに気遣う姿。愛し合う普通の恋人のそれとは何か違う。

「わたしね。学生の頃に付き合ってた彼氏がいたんだけど彼が地方の大学に行っちゃってね、それでしばらくは長距離恋愛してたんだけど、ダメね。お互いが信じられなくなるっていうか、自分自身が信じられなくなるっていうか……よくわかんないけど、すぐにうまく行かなくなっちゃってクリスマス前に別れちゃった。長距離恋愛って、お互いを信じあえるかじゃなくて、自分自身をどこまで信じられるかで決まるんだなあって、最近はそう思うようになったわ。なんでかはわからないけど、そう思うようになった」

あー、わたし、何をしゃべっているのかしら、自分で言っていて訳わかんないよ

「自分を信じる……かあ、なるほど、それは一理も二理もあるかなあ」

ダメ。そんなに遠くを見ないで。お願いだからもっと近くの、もっと近くのわたしだけを見て

そう願うなら、最初からそんなことを言わなければいいのにと、わたしは自分の唇をこっそりと、それでも強くかみ締めた。痛かった。嫌な女ね。わたしは自分を責めながらも彼の大きな肩に必死でしがみついた。本当に嫌な女。こんなことをして、彼を困らせて、それでも振り向いて欲しい。そばにいて欲しい。でも、彼らしくあって欲しい。どっちも本当の気持ち。どっちも本当の自分。

わたしの中で、今はっきりと、一つの言葉が頭の中を駆け巡る。

嗚呼、わたし、F u ・ R i ・ N してるんだ。

## 柴漬け食べたい

---

「どうしたんだい？浮かない顔して、彼と喧嘩でもしたかな？」

「もう、やめなさいよ！そういうこと言うの、本当にデリカシーがないんだから」

「なんだ？そのデ・リ・カ・シ・イイ って新しいお菓子かなんかか？」

「もう、これだからあんたたちみたいな堅物と話したくないのよ」

「フン！堅物で悪かったな」

わたしはひとり自分の部屋のキッチンのがらんとしたテーブルに頬杖をしながら、ただただぼーっと考え事をしていた。冷蔵庫が心配してぐおーん、ぐおーんとわたしに声をかけてくれた。そんな冷蔵庫にコーヒーカップが反応し、なにか文句を言っているようだ。

「はぁ」

今日、何度目のため息だろうか？

「ため息をつくと、その分だけ幸せが逃げるそうだよ。どうだい、何か食べては？」

冷蔵庫に促されてわたしは冷蔵庫の扉を開ける。缶ビール、ミネラルウォーターに卵が3個、3個セットで特売していたハムが最後の1セット、賞味期限切れててないかな？ふと、思いついた。

「こらこら！なにを馬鹿なことを！」

「気持ちいいかも」

わたしは冷蔵庫の前にしゃがみこみ思わず頭を中に突っ込んでしまった。

「オオサマノミミワ、ロバノミミー！」

「ねえ、どうしよう彼女.....ついに壊れちゃったのお？」

飲みかけのアップルティの湯気がゆらゆらと不安げに揺れている。

「お前らまだいいよ。オレなんか最近すっかりご無沙汰。全然使ってくれないんだから、忘れられちゃったかな」

トースターはカバーの変わりにかけられてフキンの裾から不平をもらす。

不意にある事が頭に浮かんだ。そしてどうしようもなくおかしくなったが、笑い出す前に何とか言わなければと、必死に堪えて、そして見事に演じきった。

「柴漬け食べたい」

ばたーん！

冷蔵庫から取り出したハムと卵。賞味期限はあえて見ないようにして、フライパンの上にサラダ油、ハムを並べそして卵を二つ割って落とす。一つは失敗して形が崩れてしまった。ふと、卵は必ず一回器に落としてから調理に使いようにと、学校で教わったことを思い出す。

「思えばわたし、一度もそんなことやったことないかも」

一瞬冷蔵庫に取り残された最後の1個を割ってみたいという衝動に駆られたが、フライパンがわたしに冷たい視線を浴びせるので、それはやめることにした。

「そういえばアイツはソース派だったな。彼はどっちだろう？まだ聞いてなかったなあ」

わたしはキャベツを取り出し、まな板の上に置いた。キャベツ——そう、出会いは一本の糸と、そしてキャベツ……かあ。ハムエッグが食べたかったのではない。わたしはキャベツが食べたかった。いや、違うかも。

わたしは少しばかり切れ味が落ちた包丁を取り出し、無心になってキャベツの千切りを始めた。どういうわけだか、そう、なぜか急にキャベツを切り刻みたくなった。いつになくキャベツは覚悟を決めたようにわたしにすんなりと切り刻まれてくれた。なんか、気持ちがいい。

「おいおい、なんだよ、なんだよアレ。大丈夫か？」

「まあ、わたしたちに当たらないだけ彼女に感謝しないとね。というかきっと彼女の親ね。ものを大事にしなさいって、きっとお父さんがしつけたのよ」

「え？なんでお父さん？お母さんじゃなくて？」

「見てればわかるでしょ。もう、何年の付き合いよ」

「そりゃあ、キミは彼女の実家から一緒にここに連れられてきたからなあ」

「そうよ。彼女はとてもわたしたちを大事に使ってくれたわ。でも、彼女のお父さんはもっとすごいよ。ずっとずっと大事にしてるマグカップとか学生の頃からの付き合いらしいわよ」

食べきれないほどのキャベツの千切りと、そのために放置された少しばかり焦げ付いたハムエッグをテーブルに並べて、わたしは少しだけ幸せな気分になった。そしてそこにソースとたっぷりかけて、口の周りをソースだらけにしながら食べた。ただただ食べた。

食欲を充たすことで、別の欲求の代替にする。そんなことしてたら、体重がどれだけ増えるかわかったもんじゃない。でも、今はこれでいい。きっとこれで、ちょうどいいくらいなんだと自分に言い聞かせる。

「今日は早く寝よう！」

冷蔵庫やカップにからかわれないうちに.....

また、彼のことを考えてしまう前に.....

じりじりと照りつける熱さにやられて、気分はすっかりブルーになっていた。夏は嫌いじゃない。でも都会の夏はどこか無機質で、永遠に続く悪い冗談のような日々が続いた。あつという間に7月はすぎ、とうとう恐怖の大王は現れなかった。それを期待はずれというのか、或いは西暦2000年になった瞬間に、世の中の全てのシステムが停止してしまうのか。しかしそんなことは、どうでも良かった。問題は.....

「先輩は夏休みいつとるんでしたっけ？」

「え、わたし？まだ予定組めてないのよ。キヨミは田舎に帰るんだっけ？」

「はい、私は名古屋に帰ります」

「名古屋か.....」

「名古屋が、どうか、しましたか？」

「い、いやあ、なんでもない、ただ、名古屋っていつごろ行ったっけなあって、思い出してただけよ」

「そうですかあ、まるで別れた彼氏でも思いだしてるよう表情してましたけど」

「別れてなんかない」

「はあ？あれあれ、先輩なんか名古屋にありますね」

「こ、こらこら、何もないって、あるわけじゃないじゃない、もう！」

キヨミとはほかの女子とは違ういくつかの『秘密』を共有していた。どういうわけだか2人気に入になると、年下のキヨミがわたしの間役になる事がしばしばある。昼休みはバラバラに食事を取る事が多い。特にこの時期は多忙を極め、女子といえども深夜まで作業が及び、出社が遅れることがある。アッコは急ぎの仕事を徹夜でこなし、今は仮眠している。サッチンはそのデータを持って、部長と新規の顧客へのプレゼンに出かけていた。キヨミと2人っきりというシチュエーションは、思い返せばかなり久しぶりだったような、そうでないような。

「先輩、彼氏さんと、うまく、いってないとか？」

「あー、えーと、そういうことじゃないんだけど、なんていうか、自分の中の問題というか.....」

「先輩でも恋愛に臆病になることあるんですね」

「いやいや、むしろ、わたしは本来臆病がデフォルトのパラメーターで、正直、こうなったのがどうかしてたのかなあと」

「マリッジブルーですか？」

「なんで、結婚もしてないのにブルーやねん！」

「あれー、結婚するとブルーになっちゃうんですか、先輩」

「あー、もう、わたしのディフェンスは隙だらけだねえ、いつかりベンジするんだから、もう」

外は地獄のように暑く、中はまた、地獄のように寒い。PCにやさしい環境は人間には厳しい。近所のコンビニで買って来た弁当を食べながら、話はキヨミの仕事の話になった。

「例のクライアントのほうはすっかり落ち着いたの？」

「はい、ご心配をお掛けしました。紆余曲折、七転八倒、二転三転しましたが、どうにかおさまりました」

「なるほど、で、安心して御盆休み取れるわけか」

「それが先輩、実は恐怖の盆休みなんですよ」

「なに、そのありそうでない組み合わせ」

「なにやら親戚筋から御見合いだのなんだのと、面倒な話が持ち上がってるらしく、今回はその火消しに行くことに……」

「お、御見合い、こりゃまたたまげた話だわ」

「でしょう、先輩。もう、これだから田舎ってイヤッ！」

「そういえばキヨミの家って、結構それなりの名家だとか言ってたっけ？」

「もう20世紀も終わろうとしているときに、これですからね。私は御見合いよりも新しいwindowsとか、i-モードの方が気になります」

「まあ、IT系の会社に努める女子としては、正しいものの言いようだけど……そんなことしていると、あっという間にオバサンになって、オタクくらいしか、嫁のもらい手なくなるわよ」

「大丈夫です。私、先輩の歳までには、絶対良い人見つけますから！」

「なによ、その挑戦的な態度と好戦的なモノ言いは、もう！もう！」

こうして馬鹿話をしている間にも、『名古屋』という言葉は、わたしの胸に小さからぬ穴を開けて、そこから隙間風が抜けていくのがわかる。こんな状態、いつまで続くんだろう。憂鬱な夏は、表向きは穏やかに、内側では嵐のようにわたしの心をかき乱していた。彼のことを思い出すと、わたしの中の何かがざわざわと騒ぎ出す。

[まるでAutomatic……](#)

[Automatic](#)

作詞・作曲・歌 宇多田ヒカル

## ぐるぐるまわって

---

「逢えない誰かを遠くに思うようなせつなさってさあ——」

「え？」

「あ、いやぁね、ちょっと思い出したんだけど、あの時の感じって、なんかこう、胸に穴が開いたような、変な感じだよね」

わたしは椅子の背もたれを抱きかけるように後ろ向きに座り、後ろの席のアッコに話しかけた。わたしはもう、開放されたい一心で、心のわだかまりの断片をあちこちにばら撒き始めた自分に嫌悪感を覚えながら、でも、やはり、誰かに言わずにはいられなくなっていた。

「えーっと、先輩、そっちの担当は、私ではないかと……」

「わかってるわよ。わかってるからこそ言ってるんじゃない」

「はぁ……」

「えー、でもさあ、でもさあ、アッコはそういうのないわけ？」

「えーっと、ですねえ、遠距離恋愛とかはしたことないというか、そういうこと事態が、あまりないというか……」

「ふうー、まあね、きっとアッコの場合だと、ショックで寝込んでしまうそうだからね、神様は、そんな事がないように越えられたに試練は与えないってことなのかねえ」

「でも、それって、越えられる人には次から次へと試練の連続ってことなんですか？」

「おいおい、この子はなんてことをいうのかねえ、わたしゃもう十分苦しんできたからもうないよ、ないったら、ないもん」

「先輩の神様って、意地悪で自分勝手な存在なんですね」

「恋愛の神様がもう少し慈悲深くて思慮が足りていたら、失恋をテーマにした名曲や恋愛小説が世の中にこんなにできることはなかっただろうから、まあ、おおかた、創作の神様と結託して、こういうことになったんだろうね」

「それ、面白いですねえ、なるほど恋愛の神様と創作の神様か」

「で、そっちはどうなの、創作の神様に愛されてる？」

「えー、今のところは、結構いい感じで愛されてるみたいで」

「おー、それは何より」

「先輩はどうです？」

「今、その恋愛の神って奴と戦ってるところよ」

「先輩ならきっと勝てますよ」

「ありがとう、ゴメンね、仕事の邪魔しちゃって」

「いいえ、恋愛の相談相手とか、わたし全然無理ですけど、聞き役ぐらいはいつでもできるので、また、焼肉食べに行きましょう、先輩」

「そうだね。ひと段落したら、また、みんなではべ一っとやろうか」

恋愛の神様――はたしてそんなもにがいるのだとしたら、わたしはいったいどんな罪の贖罪を求められているのだろう。わたしは彼に何一つ不満がない。彼はわたしに優しくしてくれる。守ってくれる。充たしてくれる。でも……

名古屋のどこかで、遠くの彼を思っている誰かがいる。彼女はきっと、いついかなるところでも、彼のことを思っているに違いない。思い出の場所、思い出の日、思い出の歌……もう、目に映るもの全てが、彼への想いへとつながって、せつなくて、苦しくて……

それでもわたしは彼を失うのが怖かった。ただ、ただ、怖かった。怯えていた。震えていた。一人の時は、いつも震えていた。合えない時間が多ければ多いほど想いは募る。会えばその想いを彼はすべて受け止めてくれる。そして彼と別れたときから、今度は罪の意識がわたしを苛む。それに耐えられなくて、また、彼に、会いたくなる。

まるでメビウスのリングの中で心の表側と裏側をぐるぐると回るような目眩。出口は見えなかった。神様、お願い、どうか教えてください。彼を愛することは試練？それとも罪？

神様は、意地悪そうに沈黙を守っていた。だからわたしは、いまのまま、ぐるぐるまわることにした。

[川本真琴「DNA」](#)

[作詞・作曲・歌](#) : [川本真琴](#)

まずいなあ……

最近はすっかり、それが口癖になってしまった。どうしてなのか、なぜなのか、わたしにはよくわかってる。わかってて、どうしようもできないから、口をついてその言葉が漏れてしまう。

まずいなあ……

「自分で作って、まずい、まずいって、大丈夫かよあれ」

「何いってんのよ、もう、本当にあんたは女心ってものがわかんないんだから！」

「ふん！わかるわけないだろう！おれはただの冷蔵庫なんだから」

最近、お気に入りのコーヒーカップと冷蔵庫がことあるごとに喧嘩をしている。なぜだかうらやましく思えてきた。もし、いま、わたしが彼と喧嘩をしたら、わたし、自分の思いをそのままぶちまけちゃうかもしれない。でも、もしかしたら、そのほうが楽なのかも……楽なのかな？

「それって、ぜんぜん問題の解決になってないじゃん！」

自分自身にそう言い聞かせる。あれ、そういえばこの言葉、最近どっかで使ったような……そうだ、この前会社で部長に噛み付いたんだった。なんのことだったかも思い出せない。ただ、イライラして、それで部長に思いっきりぶちまけちゃったんだった。

「部長、ごめんなさい」

食べかけの食器にラップをかける。考え事をしてすっかり焦がしてしまったシャケが恨めしそうにこちらを睨んでいる。

「明日、おにぎりにして会社に持っていきますから。今日のご馳走様です」

食べかけのシャケののった皿と交換にビールを冷蔵庫から取り出す。最近、晩酌の頻度があがっている。夏はビールだ！ってそんな健康的な飲み方じゃない。ビールをちびちびとまずそうに飲む。とても人には見せられない。

「楽しくないお酒は健康に毒だぞ」

不機嫌なトースターは目をそらしながらつぶやく。

「あらあら、すっかりお肌の曲がり角、気とつけないと事故起こすわよ」

洗面所の鏡は目を追うごとに口が悪くなる。わたしもそれに応戦する。

「落書きするぞ」

息を吹きかけて鏡を曇らせ、へのへのもへじを書き込む。

「下手クソ……」

ベッドにもぐりこむもなかなか寝付けない。そうだった。寝付けないから晩酌が増えたんだ。CDボックスからランダムに1枚取り出す。暗闇でスイッチを手探りで押す。なんだかミスリながらもCDをセット。ボリュームを少し絞って……なんで中島みゆきかな

2曲目の『悪女』を有無も言わせずスキップする。

「悪女なんかじゃないもん。悪女なんかに……なれない」

最後の曲14曲目の『ファイト！』が流れることには、わたしはすっかり夢の中にいたのだと思う。『ひとり上手』と『慟哭』がかすかに耳に残っている気がした。

「『大吟醸』って日本酒よね、あれ？焼酎だったかしら？」

「日本酒だよ。お前さんがべろべろに酔っ払って前後不覚になったお酒」

トースターは相変わらず機嫌が悪く、今朝も少しパンを焦がしていた。マーガリンを冷蔵庫に戻すとき、昨日の食べ残しのシャケが目に入る。

「いっけな〜い、忘れてたよ。ごめん、もう時間がない……南無三！」

バターン！

自分が情けないという気持ちが心の底からこみ上げてくる。

「しっかりしないと！ファイト！」

パーンッパーン！

いつものように頬を両手で叩き、自分に気合を入れる。でもすっかりガス欠を起こしているわたしの心は、身体にエンジンをかけることができずにいた。すっかり支度を済ませて玄関を出ようとしたわたしは不意に目眩がして、思いっきりよろけてしまった。どうしてだろう。涙が止まらない。あー、わたし、いつの間にかぼろぼろになっている。

嗚咽が止まるのを待って、会社に連絡した。完璧な鼻声で最高の演技で

「ずいません、ぎょうは、がぜで、やずみません」

その後ベッドに横たわり、CDをかけた。今度は『悪女』を飛ばさずに聴いた。

『悪女』中島みゆき

作詞・作曲・歌：中島みゆき

## Please tell me your name.....

---

プルルル、プルルル、プルルル.....

「Please tell me your name.....」

プーッ、プーッ、プーッ

イタズラ電話を防止するために、わたしは英語で留守電のメッセージを入れてある。どうせ昼間にかかってくる電話なんて、セールスか何かに違いなかった。

「こんな時間に、いるはずもないのに」

わたしはベッドにうずくまりながら、携帯電話のアドレス帳を眺めていた。仕事中に彼に電話をしたことはない。長電話は苦手。わたしも彼も、電話は用件だけしか話さない。はたから見ていると、とてもそっけない会話なんだろうなあとは思う。でも、2人にはそれが似合っていた。

「似合ってるって、何が？」

自問自答。

留守電にメッセージを入れるのも苦手だった。留守だとわかると、何も言わずに切ってしまう。でもそれって、どうなの？

「ただ、苦手なだけ？それとも、わたし、わたしって.....」

ズルい女？悪い女？

自問自答。

「そんなんじゃ、ないんだから、そんなんじゃ.....ない」

嘘、みんな嘘だわ。でも、それなら、どうしてこんなに苦しいの？

自業自得。

「そっか、わたし、苦手とか、そういうんじゃないくて、ただ、臆病なだけなのかな」

悪女に、なりたくても、なれない。でも彼を失うのは何よりも怖い。

自暴自棄。

わたしは目をつぶって、そして携帯の発信ボタンを押した。呼び出し音が3回。

「只今、留守にしております。御用の方は、ピーット言う発信音のあとに、ご用件をお入れください」

「べーっだ！フフフフ.....わたしで一す。今日会社サボっちゃったあ。特に意味はありません、では、ガチャン！」

プーッ、プーッ、プーッ

彼の家の留守電は、彼の声で入っている。でも、一字一句、テープと同じことを言っている留守電に「意味ないじゃ」と突っ込んだ事がある。

「普通、自分の名前とか名乗るでしょう」

彼は、真っ赤な顔をして「ベーッだ！」とわたしに舌をだして照れ隠しをした。彼の実直さは、時に笑いの神を呼び起こす。

精一杯のわたしの抵抗。

「こんなもんか」

そう、たったこれだけのこと。わたしは初めて彼の留守電にメッセージを入れた。もっと不安な気持ちになるかと思ったけど、驚くほどなんともない。むしろなんともないことに驚いていた。

「こんなもんなんだ……って」

わたしの声はかすれて自分でも聞き取れなかった。口は確かに「ふ・り・ん」と動いたのに、声に出して言うことはできなかった。

「きっと、今日の夜、電話かかってくるなあ。で、最初はきっと……っていうんだろうな。誤ることなんか無いのに、もう」

彼に謝って欲しくはなかった。でも、きっと彼はそうするにちがいない。いま、やさしくされたら、わたし、きっとダメ。ダメになっちゃう。

わたしの妄想は止まる事がなかった。妄想しているのか、夢の中なのか、区別がつかないうちに、気がつけば外は暗くなり、夕闇が迫ってきていた。夜は怖い。今夜こそ、眠れるはずがない。

「電話、しておこう」

携帯を手に取り、電話をする。

「あ、部長、すみません。お休みいただきちゃって」

「おー、大丈夫か？風邪か？お前が風邪ひくなんて、今年の風邪は本当にタチが悪いんだなあ。いいぞ、明日も休むなら」

「あ、いえ、大丈夫です。明日は、必ず行きますから、今日は本当に、スイマセンでした」

「そうか、まあ、それならいいが、無理はするなよ。こっちは大丈夫だから」

「はい、ありがとうございます、部長。では、失礼します」

彼にかけるつもりで、また、わたしは逃げてしまった。

「もう！わたし、何やってんだか……」

携帯をベッドの上に放り投げ、両手で髪の毛をかき乱す。今日も、長い夜になりそう。

グー、キュウウウ……

「やだ、こんなときにも、お腹は空くのね……」

冷蔵庫は空っぽだった。わたしは身支度をして、外に出ることにした。

キィィィ……バターン！

玄関の扉が閉じる音

カチャ、カチャ

カギを閉める音。部屋の中は静寂に包まれる。

カツカツカツ……

足と戸が玄関から遠のいていく

プルルル、プルルル、プルルル……

「P l e s e tell me your name……」

留守電に切り替わる

「もしもし、ゴメン、いないの……かな……」

プーッ、プーッ、プーッ

再び部屋の中は、静寂に包まれた。

[あなたを・もっと・知りたくて](#)

[作詞：松本隆 作曲：筒美京平 唄：薬師丸ひろ子](#)

会社をサボった日をピークに、わたしはどこかふっきれたような気になっていた。「気になっていた」というのは、言葉のとおり、結局何一つ解決はしていないのだ。なによりも、わたし自身、解決を望んでなんかいなかったのだから……

「まあ、今回の件は、これで行くしかないか」

「部長、それじゃああ、ちょっとマズいんじゃないか……」

「何をやってもダメってことは、何をやってもいいってことだよ」

「そんなあ、もう！わたし、どうなっても知りませんからね」

「大丈夫、どのみち、どうにもならないんだから」

部長はこういうとき、本当に肝が据わっている、或いは楽観的というのか……でも、それが結果的に悪いほうに転がらないところが、わたしにはどうにも頭が上がらないし、頼ってしまう。

「そうか、そういう時は、頼っちゃたり、任せたりしたほうがいいのか」と思えるようになったのは、わりと最近の話である。

そんな部長から食事に誘われたのは、残暑厳しい9月のある日のことだった。

「お前、最近、無理してないか？」

会社近くの日本そば屋、いつもは愛妻弁当の部長は、奥さんが夏風邪にやられたらしく、今日は珍しく外でお昼を食べることになった。そしてどういうわけか、わたしを誘い出して、今目の前で天ぷらそばのセット（冷たいそば）をすすっている。

「無理なんか全然……アッコもサッチンもキヨミもみんながんばってくれてますし、部長とマソツマンでやってた頃に比べたら、全然余裕っすよ」

決して強がりではない。あの子たちには本当に救われていると思う。公私共に。

「そうか、それならな。まあ、殺しても死なないようなカミさんでも風邪を引くことがあるくらいだから、お前も無理するなよって、ただそれだけだよ」

「ひどーい、部長」

「なにがだ」

「奥さんに対して失礼ですよ。風邪引かないなんて、そ・れ・に、わたしと同類みたいないい方して、それこそ奥様に失礼ですよ」

部長は口の周りについためんつゆをハンカチで拭きながら、照れくさそうに笑った。そして、意地悪そうな顔をして反撃の体制を整えた。

「そういうお前はいい男いないのか？ミレニアム婚とかするなら今だぞ、がんばればミレニアムベビーだって夢じゃない」

「べーっだ」

わたしは渾身の笑顔であっかんべーをした。思わず部長になら相談できるかもという誘惑に駆られ、そのことを払拭するために、多分、人生で最高のあっかんべーだったにちがいない。

「こら、こら、いい女が台無しだぞ」

部長は大きな声で笑ってくれた。でも……ちがうんです。

わたし、結構、悪い女なんです。

「すまん。お前のおかげで俺はだいぶ楽をさせてもらってる。いまどきの娘というのは、どうもな、何を話していいかわからん」

「なんですか、それえー、わたしだって、まだまだ『い・ま・ど・き』ですからね。失礼しちゃうわ、もう！」

そうなんです。わたしって、結構いまどきの、ダメな女なんです。

「かっ、かっ、かっ、かっ。だって、ほら、お前くらいしか俺のギャグで笑ってくれないから」

わたしは気がついた。そう、これなんだ。きっとこれにちがいない。わたしをイライラさせていたのは、自分に対する違和感だったんだ。部長は部長らしく、アッコも、サッチンもキヨミも、みんな自分らしいのに、わたし、なんか背伸びしてるのかもしれない。

「部長、まさか、家でもさむーいオヤジギャグ飛ばしてるんじゃないでしょうね」

「さて、どうかな。妻は箸が転がったら自分も転がって笑うタイプだからな」

わたしは本当に、心の底から、笑いたくなかった、笑い転がりたくなかった。そういう自分になりたいと、そう思えるようになった。

10月、いよいよ1999年も終わろうとしている。巷は2000年問題でもちきり、ノストラダムスの予言は、実は10年間違っていたそうで、たぶん、10年後の2009年も何事も起こらないだろう。

「ねえ、10年後ってどうなってるかな？」

「え？ああ……ごめん、何？」

「もう、聞いてる？最近考え事とか多くない？わたしに内緒で、何考えてるんだか」

「……エッチなこと」

「もう、うそばかり」

「本当だよ。あんなことしてみたり、こんなことしたら、どうなるかなあって」

「なによ、それ、そんなことより、10年後よ、10年後」

「そうだなあ、10年後には、きっと、ねえ、2019年ってどうだろう？ってしてるんじゃないのかな」

わたしは少し、意地悪をしたくなった。

「ふ～ん、誰と？」

一瞬、ほんの一瞬、彼は悲しい顔をしたような気がした。でも、すぐに笑って、それからキスをしてくれた。わたしはそれを受け入れた。受け入れるしか、なかった。

あんなことや、こんなことは、なかったけど、その日の夜、仕事が忙しくなって久しぶりだったということも会ったかもしれないけど、少しばかり激しく愛し合った。

「ねえ、仕事のほう、どう？」

「そうだなあ。まあ、ニュースでやってるみたいに、飛行機が落ちたり、証券取引所がストップしたり、銀行の預金残高がゼロになったりするようなことは、起きないと思うよ」

「たいした自信ね」

「そりゃ、そうさ。僕を誰だと思ってるの？」

「キャベツの王子様」

「え？何それ」

「えー、ウソ！覚えてないの？」

「いや、そうじゃなくて、なんでキャベツ？普通ほら、白馬とか星とか、そういう言葉と一緒につかうでしょう、王子様って」

「じゃあー、世紀末王子っていうのはどう？」

「なんかそれ、期間限定っぽくてやだな」

一瞬ドキッとした。また余計なことを言ったと思った。どうしようもなく、口をついて出てき

てしまう、意地悪な言葉。彼の鼓動が一瞬躓いたような気がした。

「だいたい、僕は拳法とか使えないからね……寝ようか」

「水、飲んでくるね……いる？」

「いや、いいよ。先に寝ちゃったらゴメンね」

「そう？額に肉って、書いちゃうかもよ」

「書いても良いけど、水性にしておいてよ」

「さあ、どうかしら」

台所の灯りはつけずに、冷蔵庫を開ける。薄明かりが台所を照らす。冷やしてある水を取り出そうとすると、ひんやりした空気が素足を滑り落ちる。気持ちいい。

コップを食器棚から取り出す。この部屋にはわたしの物は少ない。食器類はすべてあるものを使っているし、洗面用具は必ず持参する。唯一あるのは、コーヒーカップだけだ。彼がわたし用にと、買ってくれたのは、ここに来るようになって一月後くらいのことだった。

もう一年になろうというのに、わたしのものは、このコーヒーカップくらいしかない。

それでも……

それでも、わたしは、いたたまれなかった。

不意に寒気が走る。さすがに夜になると冷えてくる。激しく汗をかいた後だけに余計にそうなのかもしれないし、そうじゃないのかもしれない。彼のシャツを素肌に羽織っているだけなのだから、寒くて当たり前なのかもしれない。でも、きっとそうじゃない。たったこれだけの、ベッドから台所の距離を離れたただけなのに、わたしは寒さを感じている。

「名古屋と東京なんて、新幹線で2時間もかからないのに……わたしなら、耐えられない」

ベッドに戻ると、彼の寝息が聞こえた。わたしは彼の頭をそっと撫でた。

「本当に、書いちゃうぞ、『肉』って」

その夜は、なかなか寝付けなかった。わたしは彼の背中にそっと身体を寄せながら呟いた。

「やさしくしないで」

愛を止めないで

作詞・作曲：小田和正 唄：オフコース

## 時の流れに身をまかせ

---

それはひとつの決意だったのかもしれないし、そうじゃなかつたのかもしれない。わたしは、わたしは、[時の流れに身を任せる](#)ことにした。その先に何があるのか、わからない.....それは嘘か、きっと今よりも辛い事が待ってるのだろうと思う。

だからこそ.....

だからこそ、わたしは今を一生懸命になることに決めた。彼の優しさに思いっきりあまえて、でも彼のいろんなこと、未来も、過去もすべて受け入れて、それでダメなら、仕方がないと思うことにした。

報われない愛なんて、考えてみれば慣れっこじゃない！

それに、これは愛じゃないかもしれないし、友達以上恋人未満じゃないけど、恋人以上愛人未満？なにそれ？そんなんじゃない！

「最近どうしたの？」

「え？なにが？」

「いや～、ちょっと、ね」

「なによ」

「あ.....な、なんでもないよ、ごめん」

「『ちょっと、ね』って何？」

「いや、ほら、なんか、急に寒くなったからか知れないけど、一段ときれいになったかなあと」

「えーと、前半と後半が支離滅裂なんですけど」

「そうなんだ、もう尻が滅茶苦茶割れてて」

「こら、ごまかすな！」

「最近、意地悪度が増してきてない。実はSだったりして？」

「いまから縛りつけようか.....それともローソクがいい？」

「あ、ローソクはなんでできてるか知ってる？」

「え？ローソクって、蠟だから.....ロウってなんだっけ？」

「教えて欲しい？」

「なにその反撃.....でも、きになるじゃない」

「教えてあげない」

「もう、意地悪！」

「あ、やっと、『もう』って言ってくれたね」

「あ～、もう！ズルいんだからあ～」

今にして思えば、お互いを感じていたのかもしれない。気付かない振りして、お互いを気遣って、ギクシャクしないように、明るく振舞っていただけなのかもしれない。彼の部屋を出た後のわたしは、それまでに感じたことのないような疲労感を感じていたし、もしかしたら、彼もそうだったのかもしれない。きっと、そうにちがいない。

「ふ～、寒い」

残暑が厳しかった分、10月の終わりの冷え込みは、まるで二人の心情をそのまま表しているようだった。もうすぐ、一年、長かったのか、短かったのかわからない。一年中そばにいたわけじゃないけど、一年中、彼はわたしの心の中にいてくれた。

「でも、彼は、どうなんだろう……」

わたしは不思議な気持ちになっていた。忘れて欲しくない。彼には、名古屋の女のことは、忘れてほしくない。もし、忘れてしまうような人だったら、わたし、きっと彼を好きになんかなくてなかったに違いない。

「そんなの、どうだって、いいじゃない」

何が、どうだって、いいのか、言ってるわたしがわからなかった。不意に携帯が鳴る。彼からだった。

「あ、もしもし、どうしたの」

「あー、なんか、今日は、ゴメン、変なこといっちゃて」

「え？変なことって？」

「あー、いやー、その、Sとか……」

「は？」

「いや、気にしていないなら、いいんだ。今日は寒いから、ちゃんと布団かけて寝るんだよ」

「あ、あのねえ、子供じゃないんだから」

「じゃあ、切るね」

「うん、ありがとう」

「え？」

「ううん、いいの、ただ、ありがとうって言いたかっただけ」

「そ、そう、そうなんだ……じゃ、おやすみ」

「おやすみなさい」

わたしは、電話を切ると、その場でしばらく携帯を眺めていた。もうかかってこないか。

「あれ、どうしたんだろう、いやだ、もう、こんなところで」

気がつくと、大粒の涙が、わたしの頬を伝わり、冷え切ったアスファルトの上に零れ落ちた。

「やさしくされるのって、こない辛いんだね」

この日を境に、二人の関係は、急にギクシャクし始めた。

時の流れに身をまかせ

作詞：荒きとよひさ 作曲：三木たかし 唄 徳永英明

ひとりきりの週末。別に珍しくはなかった。わたしも彼も、最近は週末に用事が重なることが多かったし、それに.....わたしは少しだけ、彼に意地悪をしたい気持ちでいたのかもしれない。なぜだかわからないけど、彼の心の迷いみたいなものを感じて、不安になっていたのかもしれない。やさしくされるよりも、叱って欲しかったのかもしれない。『俺について来い!』って、そんな風に言って欲しかったのかもしれない。

或いは、秋の空が、わたしの心を心変わりさせたのかもしれない。

ふと、急に部屋の模様替えをしたくなった。なにをどうして良いのか、まったくわからないけど、モヤモヤした気持ちが身体を動かしていないとついつい憂鬱になってしまいそうで、怖かったのかもしれない。

「ベッドの位置を変えると、テレビのアンテナが、問題かぁ。電話機もPCと繋がっているこのケーブルをすっきりさせたいけど、だいたいなんでこんなにコンセントにいろいろささってるのさ？」

ノートパソコンのアダプターやら、携帯の充電器やら、一度線を抜いたら二度とどれがどれかわからなくなりそう。でも、無性にケーブル類をすっきりさせたいという衝動に駆られ、片っ端から線を抜き、輪ゴムでとめてきれいの床の上に並べてみた。

「これがパソコンのもので、携帯がこれ、そんでもって、電話の子機が.....? うん? なんだこれ？」

30分もしないうちに訳がわからなくなり、そして.....

「やばい! 電話繋がらないぞ」

それから、いろいろ試したものの、どうにも電話が繋がらない。携帯を開き、アドレス帳で彼の電話番号を呼び出す。しばらくその番号を眺めていると、ぱっと携帯の液晶画面が暗くなる。

「はい、時間切れです」

わたしはそのまま、ベッドに寝そべり携帯電話を枕の横に放り投げた。

「意地張って、どうするのよ」

誰に向かって言うわけでもなく、強いて言えば、それは、きっと、携帯電話に向かってだろう。不意に携帯の着信音――もしかして彼？

わたしは携帯の画面も見ずにいきなり電話に出た。

「もしもし？」

「あ、あのぉ、お久しぶりです」

あいつだ……そういえば、あの風船みたいな妹タイプとうまくいってるのか？

「い、今お時間、大丈夫ですか？」

「ど、どうしたのよ、そんなあらたまっちゃって」

「い、いや、そ、その、あのですね。ちょっと相談に乗って欲しい事が、ありまして」

「なんだい？恋の悩み以外だったらなんでも相談のるけど」

「え、え～、そ、そんな」

「あんた、まさか、あの子とうまくいってないの？」

「い、いええ～、ばっちり、うまくいってるんですが……」

「うん？ならどうした？まさか、できちゃったとかいうんじゃないでしょうね？」

「そ、そんなんじゃないですよ、ちゃんと、してますから」

「ぷ、ぷはっ、ぷはっ、ぷはっ、ははは」

「あ、あー、もう、そういうことじゃなくて、そのしてるじゃあ、なくてですね…」

なんとなく、話が見えてきた——そうか、いよいよか

「あの、僕たち、結婚をしようと、思うんですけど……」

「おー、プロポーズ、ばしっと決めたのか！」

「いえ、それが、その、まだでして……」

「ほ、じゃあ、どうした」

「そ、そのプロポーズのことで、ちょっと相談にのって欲しくて」

「は？」

「いえ、ですから、そのお……」

あいつの話では、こうである。

彼女にプロポーズをしようと、いろいろと画策していたところ、彼女の友人があつからのプロポーズをすごく楽しみにしているみたいという情報を仕入れた。あいつは、そういう事が器用にできるタイプじゃない。オーソドックスに婚約指輪を相手に渡して正面からプロポーズをしようと考えていたらしいのだが、その友人いわく

『最近、みんないろいろプロポーズも凝ってるからね。普通のプロポーズじゃ、ガッカリさせちゃうかもよ』

いるんだ、そういうことをいう奴が、わたしみたいに他人の幸せを喜べずに、つつい意地悪

をしてしまう。それを真に受けたあいつは、すっかり悩んでしまった挙句に、わたしに電話をかけてきたというわけなのだが、それこそ筋違いだろう！

「大丈夫よ！バシッと男らしく、ガツーンとやれば！それに彼女はそんな、悪趣味じゃないと思うよ。それはあんたが一番良く知ってるし、だから結婚しようと思ったんじゃないの？」

わたしも相当なお人よしだ。

「ありがとうございます。そうですよね。よかったあ、相談して、じゃあ、これからぶちかましてきます！もし、うまくいかなかったときは、その時は、一緒にヤケザケ付き合ってください！」

「おー、おー、あたって砕けて来いー！粉々に砕け散ったら、思いっきり笑ってあげるから」

なんという週末だ……しかし、なぜだか清々しい。そして思い出した事がある。

「あ、そうか、前に、あいつがネットが繋がらないとか言って、電話してきたとき、確か……」  
わたしの頭の中で、ぐるぐるにこんがらがっていた線が、ぴーんとつながり、一つの結論を得た。

「お、できたじゃん！わたしエライ？ねえ、エライ？」

不機嫌そうな電話機は、相変わらず黙ったままだった。それはまるで、今度かかってくる電話をわたしにつなぎたくない、そう、訴えているようだった。

「どうしたの？」

「え？あ、あ～、ちょっと考え事、ちょっと仕事のほうがね、煮詰まってる」

「ねー、知ってる？『煮詰まる』って悪い意味で使う言葉じゃないみたいよ」

「え？そうなの？」

「本当は料理の鍋が煮詰まってもう食べごろ、美味しくできましたって意味で、考えが固まったときに使う言葉なんだって」

「あー、なるほど、それがいつの間にか、考えがうまくまとまらないみたいなの、そんな意味で使われるようになったんだ。すごいね。よく知ってるなあ」

わたしは舌をだしながらとびっきりの笑顔を作りながら答えた。

「ちがうの、これね、ついこの前会社の上司に注意されたのよ。わたしが『煮詰まった～』って頭抱えてたら『ほー、いい考えでもまとまったのか？』ってね。でも、わたしは確信するわ。部長もきっと最近誰かに言われたのよ」

彼はどこか上の空で、わたしのとびきりも通用しないようだ。コーヒーを一口、口に運ぶと、ふと、思い出したように彼は話し始めた。

「なるほど、そういうことか。きっと、最初は『行き詰まる』と言っていたのに、『行き』が『煮る』に変わっちゃたんだね。煮詰めた味噌汁やコーヒーが不味いから、なんとなく煮詰めるという言葉も最近は、悪い意味で使われるようになったからかもしれないね。まあ、それに『行き詰る』は思いつめた感じが強い表現だから、みんななんとなく使いたくなかったのかもね」

「ちょっと、それってなんか含みのある言い方ね」

「あ、ははは、べ、別に深い意味はなく、浅い思い出の話さ」

「もう、どうせわたしは料理下手ですよ」

わたしには、浅い思い出よりも深い意味の方が問題だった。わたしは行き詰っている。

「そんなことないさ、そうだ。ねえ？今日は僕が料理を作ってあげる。しばらく逢えなかった埋め合わせに」

「なんか素直に喜べない話の流れだけど、いいわ、お手並み拝見といきましょうか。で、何を作るつもり？野菜炒め？焼きそば？」

わたしは別に嫌味を言ったわけではない。彼はおよそ一人暮らしを始めてからその二つと、チャーハンで暮らしていたのだ。その腕前はたいしたものなのだが、彼曰く、それ以上のことを覚える必要性を今は感じていないのだそうだ。

「さて、今日はね、ちょっと違うものを作ろうと思ってるんだ。というわけで、この後、僕はそ

の食材を買いに行くから、先に僕の部屋に行って待っててくれないかな？食材を見られると、何を作るかばれちゃうから」

「なにに、そのビックなサプライズでもあるような意気込みは、期待と不安が渦巻いちゃう」

「期待と不安ね、どちらかという不安に比重を置いてもらったほうが、この場合は気が楽かな」

「えー、そりゃーもう、6対4か7対3くらいで、不安な気持ちで待たせていただきます」

「それでも十分、期待値が高いね。その期待にこたえられるよう、頑張ります」

コーヒを飲み終え、喫茶店『Antiques Melody』——わたしたちの言うところの『アンメロ』を出ると彼からカギを預かり、二人は分かれた。わたしは一瞬、このカギをどうにかしようかと考えた。

「合鍵を内緒で作って、ある日突然、夜這いをかけたら強盗と間違えて投げ飛ばされちゃうかな」

彼は学生時代、柔道をやっていたそうだ。彼の柔道着姿は、それはそれは凛々しかつたに違いないという妄想は、ひそかなわたしの楽しみである。それにしても、どこか似合わない。柔道着がというのではなく、気合とか、根性とか——さっきの『頑張る』もそう。彼は自然体のままで、すべての力を汗一つかかずに出せるような、妙な清清しさがある。『妙な』と言うのは、わたしにとっては褒め言葉だ。わたしはわたしが可愛く、愛しいと思ったものに対して、時々そういう表現を使うのは、周囲に対する、わたしの精一杯のはにかみなのだ。

彼の部屋の前、いつもとはちがう緊張感。実際一人でこの部屋に入るのは初めてだ。一人でいたことはあっても、入るときは彼がいつも扉を開けてくれた。一緒に部屋に入るか、彼が出迎えてくれるか。

「案外と不安になるものね」

自分がカギを開けて一人で彼の部屋に入る。どうでもないようなことが、すごく特別に思えるって、こういうことなのかと思いながら、わたしはカギを差し込み、カギを開けた。ガチャっという音が、とても冷たく感じられた。いつもとは違う、まるで他人の家に勝手に入るような違和感……ちがう、そう、まだわたしたちは他人同士なんだから、それは当たり前のこと……でも本当にそう？

一瞬ドアを開けるのをためらい、もう一度カギを掛けようかと思った。

「下で、待ってようかな」

プルルル、プルルルル……

電話だ。彼の部屋の電話。とっさにカギを開けて部屋に入る。パンプスを脱いで、部屋に上

がり、電話の前まで――受話器に手がかかる寸前で、ふと、我に返る。

「彼なら、きっと、携帯にかけるわよね」

わたしは携帯の着信履歴を確認し、誰からも電話がないことを確認した。

「この電話にでたら、どうなるかな」

でも、わたしは、悪女にはなれなかった。留守電に切り替わる前に、電話が切れた。誰からなのか確認するすべはないけど、わたしにはわかった。彼は電話に出れるときは3コール以内に電話にでる。彼をよく知る人物からの電話であることは、なんとなくわかった。

「これって、女の直感ってやつね。きっと、よかったわ。わたしが女だってことが、またひとつ、証明された瞬間だわ」

わたしは部屋を出た。彼が来るまで、外で待つことにした。

「台所は覗いちゃだめだよ」

「なんかあれね、鶴の恩返しみたいね」

「そう、だから絶対にいいというまでは開けてはいけません」

「もし覗いたらのどうなるのよ？」

「それは内緒」

「内緒なの？」

「うん、内緒」

彼を表で待っていたわたしに「ゴメン、ゴキブリでもでたかな？」って笑いながら、声をかけてくれた。正直、問い詰められたら適当な言い訳が思いつかなかっただけに、彼の優しさがうれしくもあり、悲しくもあった。

「じゃあさあ、覗かないから、その代わりに、何か面白い話を聞かせてよ」

「面白い話？」

「うん、面白い話」

「むかし、むかし、あるところに、おじいさんとおばあさんがいました」

「ふんふん」

「おじいさんは山に芝刈りに、おばあさんは川に洗濯に……おっと、じゃがいもの皮むきどこだっけ」

「台所の引き出しの中にある？」

「おー、あった、これこれ、おばあさんが選択をしていると川上から大きな……」

「じゃがいも？」

「ちがうちがう、桃だよ、桃」

「手とか切らないでよ」

「大丈夫、桃は切っても指は切らないよ」

それを幸せな時間といえはそうなのだろう。不倫とか、愛人とか、そういうのではなく、私たちは愛とか、セックスとかそんなんじゃない、ただ、こうして会っているのが楽しくて、そして帰らなきゃいけない時間が来ると、ただただ寂しくて、仕方がなくなる。寂しいからまた会いたくなるし、それをこうして、一年近く繰り返してきただけ。

つらいとか、悲しいとか、そういうことじゃなく、でもどこか後ろめたいのも事実。何よりも二人がそれを自覚して、お互いを気遣っている。もしも、もっと早くに出会っていたら……そんなことを思うことがあるけど、でもいつも答えは同じ。こうして出会わなければ、きっとお互いを見つけることはできなかった。こんなふうにしか、出会えなかったにちがいない。

「あー、なんかいい匂いがしてきた」

「あれ？もしかして匂いで料理わかつちゃう？」

「どうかな？もし間違っていたらシャクだから言わないもん」

「正解した方にはもれなく」

「もれなく？」

「おいしい料理がたべられます」

「えー、正解したい、正解したい」

肉じゃががカレーライスのどちらかで、たぶん肉じゃがだと思う。醤油の香りがしてくるかどうかで決まるけど……

「お！これはなかなか」

「えー、なにに、味見させて、味見」

「まだ、だめだよ」

エプロン姿が妙に似合わない。彼は体が大きすぎる。でもその大きな背中がわたしを安心させる。男の人の背中はときに寂しそうに見えることもあるけど、彼の背中にはそういうくらい色はないように思う。

「ねえ、まだぁ？お腹空いたよ〜」

「もうできるよ。ちょっと待っててね。今茶碗とか用意するから」

「あっ……」

「え？どうしたの？」

「あああ……やっちゃった」

「え？何を」

「いや〜、これ作るのに夢中になって、ご飯を炊くのをすっかり忘れちゃったよ」

「えー、でも、肉じゃがなら大丈夫じゃない？」

「あ、わかつちゃった？」

「わたしを誰だと思ってるの、肉じゃがの作り方を覚えて依頼、そのヴァリエーションでここまで食いつないできた女よ」

「す、すごいな。どこで感心していいのかがわからないところがすごいね」

食卓に鍋一つ、それを囲む二人の間に甘く香る湯気が立つ。わたしが彼に始めて作ってあげたのは、肉じゃがだったかポトフだったか……思い出せないけど、その二つのうちのどちらかで、きっとそれは肉じゃがに違いがないのだと、今確信した。

「すごい！わたしよりも見た目が肉じゃが！」

わたしはどんなふうに喜んだらいいのか、はしゃいだらいいのかわからなかった。うれしいこ

とはうれしい。でも、なんでもそつなくこなす彼に少しだけジェラシーを感じてもいたし、何よりも彼の中に、わたしの部分、わたしが作って食べてもらった料理を覚えてくれたことに少しばかり動揺していた。

このモヤモヤした感じは何なのだろう？すごくうれしいのに、後ろめたい気持ちがこみ上げてくる。このままじゃいけないと思えてくる。

ホクホクのじゃがいもはちょうどいい火の通り加減で味も完璧にしみていた。おいしい。彼はきっとわたしなんかに出会わなくても、こんなふうに料理を作れたに違いない。

彼も同じことを思っているのかな？

「こうして自分で料理を作って、おいしいって言って食べてくれるのって、結構うれしいものなんだね」

そんなことをボソリと彼が言った。食べ終わった後、洗い物をわたしがするからと言っても、彼は最後までやるときかなかった。台所で食器を洗う彼の後姿。わたしはそのとき、初めて、彼の背中になんともいえない哀愁を感じたのを一生忘れない。男の人ってこういうふうに背中で泣くんだね。

彼の心はここにはなかった。

その日、わたしは明日は朝早くに用事があると嘘をついて、彼の部屋を早めに出た。わたしの部屋まで送ると彼は言ったけど、まだ早い時間だから大丈夫だと断ってしまった。わたしには自信がなかった。もし、彼がわたしの部屋まで送ってくれたら、きっとそのまま彼を引き止めてしまったに違いない。

何かが変わろうとしている――そんな気がした。

「月が、なんだか寂しそう」

夜空に三日月が浮いている。それは今にも消えてしまいそうなくらい細くて、石を投げつけたら壊れてしまいそうに見えた。もしそのとき、足元に小石が落ちていたのなら、きっとわたしは石を投げてしまったに違いなかった。仕方がないので夜空の三日月を指でなぞって、そしてその指で弾き飛ばしてみた。

わたしには、三日月がくるくるとコインのように回って見えた。クルクルまわる三日月にふーっと息を吹きかけるとゆらゆらと回転を鈍らせて空からわたしの手のひらに落ちてきた。

「ごめんね。いま夜空に返してあげるから」

眼を回している三日月を力いっぱい夜空に向かって投げ返した。三日月は冬の夜空に見事に突き刺さっている。なぜだか少し、わたしの胸にも何かが突き刺さったような痛みが走る。

「負けないんだから！」

意味も無くわたしは意地をはって見せる。意味なんか必要ない。

## 特別じゃないけど

---

彼もわたしも出不精だったし、電話やメールもマメにするタイプではなかった。どこか電話で話すのが苦手だった。わたしは彼の姿が見えないことがどことなく、不安だったのかもしれないし、彼は彼でわたしがどんな顔をして話をしているのか心配だったのかもしれない。

そんなふたりだから、こういうときには、もう、どうにも出来なくなってしまう。

互いに気遣って、なんだか電話をすることができない。会いたいとただ一言、それだけを伝えればいいのに、なにか用事がないとかけては電話をしてはいけないような錯覚に陥って……もしかしたら、そういうフリをしていただけなのかもしれない。できない理由を探すことを探すのは簡単だと、つい、この前部長に叱られてばかりだった。

「本当、簡単だよな」

ともすればわたしは、その日の天気のをいにして、暑いから、寒いから、風が強いから、雨が降ったからと、出来ない理由をこじつけては、そのくせ、彼から電話がないかと、四六時中携帯の着信履歴を気にしている。彼は3回鳴らして相手が出ないときってしまう。まず、留守電に吹き込むことはしない。そういうことが苦手だという彼には、きっと留守電にかんするいやな思い出があるに違いないのだと、勝手に決め付けたわたしは、つまりは、そういうことも出来ない理由にしているだけなのだ。

出会ってちょうど一年。それにいったいどんな意味があるというのか？

再び待ち待ちはクリスマスの準備で華やいでいる。しかも来年は2000年、なにかとミレニアムなのだ。

「先輩はクリスマスの予定、どんな感じなんですか？なんかすごい一流のホテルに予約がとってあるとか？」

サッチンは、なにやら壮大な勘違いをしているようだ。

「ないない、そんなのあり得ない。だってほら、今年は何が起きるかわからないでしょう？」

「Y2Kとかいっても、結局何も起きないんじゃないですかねー？でも一応、預金口座から少し大目にお金は下ろしておこうかと思ってますけど」

「そうねー、そのくらいはしておいたほうがいいのかもね」

「あれ？なんか先輩つれないですね。なんかぜんぜんノリが悪いんですけど」

「そう？いつもどおりよ」

「うそ、なんかあったでしょう？」

「ど、どうしてあんたはそうやって平地に乱を起こしたがるかね」

「だってつまらないんだもん」

「お？なんじゃそれは」

「だって、先輩、最近一緒にご飯食べに行っても、我ここにあらずつて感じで」

サッチンの洞察力の高さは恐ろしい。これが俗に言う女の感というヤツなのか。わたしも少し見習いたい。

「あ、あの、幸恵さん？わたくしのどこが、我ここにあらずつとおっしゃいますの」

サッチンの目が一瞬輝く。

「先輩！そうこなくちゃー！」

「どうにも疲れるなあ……」

「もしかして、先輩、倦怠期？」

「なんと！」

「これぞミレニアム倦怠期ですねー！」

「こらこら、なんでもミレニアムつければいいというものじゃないし、だいたい、ひとつもめでたくない！」

「あ、やっぱ否定しないんですね」

「うっ……イタッ！、いたたたた」

「あの一、もしよかたら、年末はどこかでパーッとやりませんか、ミレニアムだし」

「そ、そうね、パーッとやりましょうかね……なんかすっかり乗せられた感じだけど」

「のせられたら飲めよ！飲んだら乗れよ！」

「どういう標語だよ、不謹慎な」

「肉、肉、ニク、ニク」

「あー、もう聞いちゃいない」

「やっぱ、肉ですよ、肉」

「わかった、わかったから、いつものメンバーに声かけておいて、わたしはいつでもOKだから」

「あれ？いつでもOKなんですか？」

「そこを突っ込むな！そこを！」

「あいー、じゃー、そのあたりは、今回の呑み会……じゃない焼肉会の酒の肴ということで」

「あー、もう、煮るなり、焼くなり、あぶるなり好きにしてください！」

「ラジャー！」

わたしはサッチンと話をしている間も、携帯をいじって、着信履歴を確認していた。彼から携帯に電話があったのは、もう、一月も前になる。わたしは思い切って彼に電話をすることにした。会社の女の子たちと焼肉を食べに行く約束をしたので、それ以外の日に、うちに遊びに来ない。肉じゃがに負けない料理を作るから。たった、それだけのことを電話で話するのに、それから3日を擁した。来週の土曜日という約束を取り付けて、ほっとするわたし。

最後の晩餐は、こうして訪れた。

## 最後の晚餐 1

---

どこかよそよそしい——というよりも何かものすごく申し訳なさそうで、めずらしく言葉のはしはしに迷いが感じられた。でも、いい。それは彼の迷い。わたしの迷いじゃない。わたしは彼に会いたいという衝動からは解放され、心は自由だった。でも、だからといってなにも不安を感じないということとは全然違う。

夜は心細かった。でも、大丈夫。みんながわたしを支えてくれる。

サッチンもアッコもキヨミも、いつもわたしを心配してくれるし、励ましてくれる。部長は暖かく見守ってくれるし、間違った時は叱ってくれる。部屋にいるときだって、独りぼっちじゃない。ときどき、うっとうしいと思うこともあるけど、無骨な冷蔵庫も、おしゃべりなコーヒーカップも、皮肉屋の鏡も、みんなわたしを気遣ってくれる。

それでも、どうしようもなく、人恋しくなることがある。わたしは気付いてしまった。彼じゃなきゃいけないと、彼しかいないと思いつめていたわたしは、本当は、誰かに甘えたくて、誰かに寄り添いたくて、誰かに支えて欲しくて、誰かに包んで欲しくて、そんな気持ちを押し殺してきたわたし自身のもう一つの顔、もうひとりの自分、抑圧されていた自分が彼の前にいるときのわたし。

え？ なに？ なんだかわからなくなってきたわ

ともかく、わたしは彼とであって、かわることが、できた。そう、わたしはもう、あのときのわたしじゃなくなっている。ただ、怯えて、怯んで、自分の庭でしか心を解き放てなかったわたしは、彼の腕にしがみついて、どうにか外の世界にでることができた。このまま彼の腕にしがみついて、どこまでも、どこまでも歩いていきたいという気持ちは、それはある。あるけど、そうじゃなきゃいけないという、そういう衝動みたいなものは、驚くほど、小さく、小さく、でも無視できないような場所にぽつんと存在している。

彼の事が好きな気持ちは、どんなことがあろうとも、変わる事がない。

そのとっても、とってもピュアな部分だけで、恋愛ができるのなら、人はどんなに自由なんだろう。でも、それはわたしが今、住んでいる場所じゃない。それは、はるか昔、わたしが少女と呼ばれ、笑顔で「はい」と答えていた世界での話。過去にはあっても、未来にはない世界。

「彼とのことは、今はあっても、未来は……」

ぐっとこみ上げてくるものをこらえて、わたしは部屋をでる。

「いってきまーす」

わたしはカラ元気を羽織って、買い物に飛び出した。

「いってらっしゃーい」

「財布忘れてない？」

「買いすぎるなよー」

コーヒーカップ、洗面台、冷蔵庫が快くわたしを送り出してくれる。

タマネギ、ニンジン、ポテト……そしてあのときと同じ、キャベツをひとたま

「ぐっ……重いな、これ、あ、あとは、ウインナーソーセージっと、コンソメはまだあるから大丈夫……よし！」

ポトフの材料を買い揃える。

「なにさ、これくらい、たいしたことないもん！」

レジ袋ふたつ、両手に下げて、少しばかり、しかめっ面のわたしは、さぞかしかわいかったに違いない。違いないんだから！

「ダンスはうまく踊れないけど、盆踊りならできるわさ」

あの日のように、軽やかな足取りではないけれど、力強く、しっかりとした足取りで、部屋に帰った。時計は2時を回っていた。彼が来るのは5時過ぎ、部屋を少し片付けてから台所へ。これからやることを頭の中で整理する。

「まず、じゃがいもを洗って、皮をむいてボールに入れて水を張るでしょう。タマネギとニンジン、キャベツをザク切りにして、そうそう、先にお鍋に水を入れて沸かさないと。で、沸騰する前にコンソメをいれて、鍋が煮立ったら、具を全部入れる。で、中火で15分くらい煮込んだら、ソーセージを入れて、弱火にして、5分くらい煮て、火を止めて、鍋を冷ます。冷ましている間に、味がしみ込んで、もう一度火を入れるときに塩コショウで味付けね。よしよし！ あとは彼が来るのを待つだけね！」

料理に取り掛かろうとしたとき、急にわたしの中に不安な気持ちが渦巻き始めた。どこか気持ちがそわそわしている。料理はきつとうまく行く。でも、彼が来るかどうかは、わたし次第じゃない。わたしは待つしかない。今まで、不安になることはなかった。彼が来ないなんて、そんなこと、考えたこともなかった。なのに、この時ばかりが、どうしようもない不安がわたしを押しつぶそうとしていた。

エプロンをするのも忘れて、頭の中は彼のことばかり、つつい手元もおろそかになる。

「痛っ！」

エンジンを切る手がすべった。

「もう、バッカみたい！」

「大丈夫、傷は浅いぞ……」

小指から、少しだけ血が出ている。

「大丈夫かい？ほら、みせてごらん？」

「えっ？」

一瞬彼の声が聞こえたような気がした。そう、わたしは大丈夫。大丈夫なのに、彼は本当に心配そうにわたしの指を眺めて言うの。

「馬鹿だなあ」

違うわね、彼はきっと本気で心配して、僕が変わりにやるとか……ううん、『何か心配事でもあるの？』てそんな感じかな。自分でそんなことを考えて、ほとんど馬鹿馬鹿しくなってしまった。

「馬鹿だなあ……もう」

「来るかなあ」

「プルルル…プルルル…」

いつになく、電話の呼び出し音が、無機質に、冷たく感じられた。わたしはその電話に出る事が、すべての終わりになるような、そんな予感がした。

でも大丈夫、わたしは、もう、大丈夫なんだから……

## 最後の晚餐 2

---

自分ではしっかり気持ちの整理が出来ているつもりだったけど、いざとなると体が震えてしまう。コンロの火を止めて、電話の前まで来ると、もう逃げ出したい気持ちで一杯になっていた。

電話に出たくない。

お願い。誰か、電話のベルを止めて……

いつもは陽気な電話の呼び出し音も、どこことなく弱弱しく、申し訳なさそうにしている。そう、この電話は彼からの電話。そして多分最後の……

「もしもし……」

震える手で受話器を取り、そのことを彼に気取られないように、なるべくいつものように電話に出た。

「ごめん、俺、いけない……もう逢えない……ごめん」

彼はいつもより少し低い声のトーンで切り出した。いつもとちがう彼。そう、彼がいつもどんな感じなのかはわかるのに、普段のわたし——彼の前のわたしってどんなふう？ それって本当に普段のわたし？

「そっか……うん……」

本当は何もわかってなんかいないのかもしれない。それともわかりたくないのかも……それでもわたしは電話口で申し訳なさそうにしている彼を攻めたり、問いただす気にはなれなかった。そういうのは、ちがうと思った。なんだろう？ 不思議な感覚。求めても得られなかった答えがふっと浮かんできたような、思い出せなかった何かを急に思い出したようなそんな感覚。或いは夢から覚めたような、そんな感覚。

「うん、わかった……わかったわ。じゃあ」

そう、わかったような気がした。決めなければならないときに逃げちゃダメなんだ。

「えっ……あああ……。そっか。じゃあ、元気で……」

きっと彼はいろんなパターンを想定していたのだと思う。そうでなければ、『元気で』という言葉、こんなに素直にはいえないだろう。ただ、もう少しだけ、話をしたかったのかもしれない。ううん、ちがうかも……

とにかくにもわたしたちは、このとき、出会ってから初めて素の自分——互いの顔が見えない電話越しに、素顔で話が出来た気がする。

「うん、大丈夫だから...大丈夫だから」

それでも最後は強がって見せた。これも女の意地よ。覚悟はできてたんだから。彼にすがったりしない。わがままを言って困らせたりもしない。彼からは何も奪わない。いままで、いっぱいいっぱいやさしさをくれたから。

意地っ張りー或いはそれを嘘といえはそうなのかもしれない。わたしは、最後に彼に嘘をついた。

部屋中の空気が静まり返る。

電話も、冷蔵庫も、時計も.....みんなわたしに気を使っているようで、心が痛かった。キッチンの蛇口からひとしずくの水が流れ落ちる。

電話を切り、大きく深呼吸をして、わたしはキッチンに戻った。冷蔵庫がうおんうおんと音を立てる。小指にバンソーコーを貼り、コンロの火をつける。おとなしかった鍋が、またぐつぐつと音を立てる。ふたを開けると湯気がわたしをやさしく包む。コンソメのいい香り。おいしそう。野菜を切り、御鍋の中にニンジン、ポテト、えのきにタマネギ。スープの中でダンスを踊る。野菜に火が通ったらウイナーソーセージを入れて弱火で煮込む。ウイナーのうまみがスープに溶け込んだら塩とコショウで味付け。うん、美味しくできた！

でも、どうして、美味しくできたのに、ちっともうれしくない。だって作りすぎだもの。彼との最後の晩餐にするつもりが、わたし一人きりになっちゃった。ダメね。やっぱりこういうのって。

どうしようもない胸の痛み。嗚咽が止まらない。悲しくないのに涙が止まらない。

わたし、泣いてなんかいないのに。

泣いてなんかいない。

涙なんかじゃない。

涙なんかじゃ.....

ひとりぼっちの晩御飯。不思議と涙は出なかった。

「あれ？なんか味見したときよりも、味が濃いな」

ひとりでテーブルに腰掛け、出来上がったポトフを食べてみる。

「わたし、こんなに料理下手だったかなあ.....」

少し煮込みすぎてしまったみたい。ちょっとしょっぱいけど、いまのわたしにはこれでちょうどいいのかもしれない。涙がしょっぱいなんて、すっかり忘れていた。

「わたしも少しは成長したのかな？前に失恋した時は3日は食欲無かったのに」

二人分のポトフを一人で平らげてしまった。空になった鍋を洗う。鍋のそこに一切れのタマネギがしがみついている。「こら、いつまでしがみついているんだい？わたしはそんなに未練がましくないんだから！」

「よく言うよ。本当はまだ、未練が残ってるんじゃないのか？」

鍋がわたしにけしかける。

「そんなことないわよ。もっと料理の腕を磨いて、いい男見つけるんだから！」

「そうよ。女は振られて強くなるんだから！」

コーヒーカップが加勢してくれる。

「でも、まあ、次くらいで決めたいんですけどね」

「化粧を直したら？いい女が台無しだよ」

洗面台の鏡がいつもの調子でわたしをからかう。

「いまそっちにいて、とびっきりの『あっかんべー』をしてあげる！」

悲しいのになんだか楽しくて、せつないのになんだかスッキリしている。彼とはもう会わない。会えない。でも、どこか身近に感じているし、わたしのなかで、素敵な思い出？それともおとぎ話やよくできた恋愛小説のように心の中に残っているのかな？だって、わたしは信じているから。きっと彼は、彼の帰るべきところ、いるべきところに戻るはずだと。そう、何もかも元通り。わたしも独りぼちに元通り。でも、寂しくなんかない。彼がくれたたくさんの思い出は、いつでもわたしを励ましてくれる。いつでもわたしを見守っていてくれる。そしてわたしはわたしのいるべき場所へ、まだ見ぬ素敵な王子様と出会うために、もう少し女を磨いて、もう少し大人になって、背伸びをしなくてもいいような素敵な恋愛をしてみせる。

「大丈夫、大丈夫なんだから！」

わたしは心の中で背伸びしていた冬のブーツを脱ぎ捨てて、鏡に向かって、そう、背伸びしていた自分に向かって『あっかんべー』をしてみせた。

「本当に、ここ、閉めちゃうんですか？」

「そうだね。残念な気もするけど、永遠に続けることもできないからね」

「後継者が育たないとかですか？」

「育たないんじゃないんだ。ワシはこの店を他の誰かに任せるなんてことは、これっぽっちも考えてはせんのだよ」

「さみしいなあ」

「そうじゃな。さみしいけど、もう十分じゃよ」

「もう十分？」

「そう、たくさんの人に愛されているんな物語を見せてもらったし、ときには一緒に喜んだり、悲しんだりもして、まるで人生そのものじゃったよ」

「コーヒーの味も香りもわからないよな小娘がいうのはおこがましいですが、わたし、このコーヒー本当に大好きでした」

「そうかい、みんなそういつてくれる。この店はなくなるけど、きっとみんなの心の中にいろんな物語と一緒に残ってくれるんだと、ワシは信じておるよ」

喫茶店『Antiques Melody』が店を閉めると聞いたのは数週間前のことだった。この店での思い出は、どれも素敵なものばかり。わたしは3年ほど前にこの街を出て、今の旦那さんと一緒になった。あの人とは、一度もこの店に来た事がなかった。ううん。そうじゃない。ここには常に先客がいたから――わたしの素敵な思い出。

「先輩、お久しぶりです」

「先輩はよしてよ。もう上司とか部下とかじゃないんだから」

「でも、わたしにとっては先輩は先輩です！」

「で、そっちはどうなの？うまくいつてる？」

「そりゃあもう、ばっちりです！」

「なにがよ」

「今度の彼、すっごくやさしいんですよ。まあ、でも先輩の旦那さんには負けちゃいますけど」

「おいおい、そういう御世辞はいろんなところが痒くなるからやめんかい！」

「ははは、でも本当に素敵な旦那さんですよ。私がなかなかいい人にめぐり合えないのは先輩のせいですからね！先輩の結婚式に出て、このままじゃいけないって、本気で思いました」

「あ、あのね。あんたの前の彼氏もなかなかのいい男だったと思うけどね」

「えー、あれはダメですよ」

「あれって、オイ！罰当たりなことを言うでない！サッチン」

結婚して、会社を辞めて家庭に入った。結婚式には部長をはじめサッチン、アッコ、キヨミ

んなが祝福してくれた。今でも3人にはときどきメールやSNSで連絡を取り合っている。『Antiques Melody』のことを聞いたのはサッチンからだ。今のサッチンの彼氏がたまたまわたしが一人暮らししていた街に住んでいて、彼氏の家に遊びにいったときにそのことを知ったのだという。

「私的には、どうかなあと思ったんですけど、一応報告しておいたほうがいいかなあと思いまして」

「ありがとう、サッチン。『Antiques Melody』のマスターには本当にお世話になったから、ちゃんと挨拶しておかないとね」

「前の彼のこと、思い出してセンチメンタルモード突入ですか？」

「あ、あのねえ」

「はい、わかっております。このことは他言無用ということで」

「わ、わかればよろしい。えっ、何よ、まさかあんた口止め料になにかおごれと？」

結局サッチンに今度スウィーツバイキングをご馳走することになった。いや、それはむしろわたしが食べただけなのかもしれないが.....

「で、マスター、ここ閉めてどうされるんですか？」

「コーヒーの楽しみ方を知らない子が増えているでな、おいしいコーヒーの入れ方を本にでもまとめてみようかと思っただけ」

「本って.....作家にでも？」

「まあ、そんなたいそうなものじゃないさ。何も後継者というのは特定の誰かである必要はないと思っただけ。一人でも多くの人にコーヒーの楽しみ方を伝えるにはどうしたら良いかなと考えていたら、本でも書いたらどうかって、ある人に薦められたんじゃよ」

「あー、なんかそれ、素敵かも。わたし、絶対その本買います！買ったならサインしてくださいね」

「おー、これは幸先がいい。もう予約が2件も入った」

「え？私以外もう予約している人がいるんですか？」

マスターはにこにこ笑いながら、カウンターの下から何か箱のようなものを取り出した。

「実は本を書くことを勧めてくれた人が、これをワシにプレゼントしてくれたんじゃよ」

見ると箱の中にはケースに納められた黒の万年筆が入っていた。

「へえ、いまだき万年筆の贈り物なんて珍しいですね。でも素敵」

マスターは大事そうに万年筆を眺めながら、わたしに言った。

「これはね。あなたのよく知る人からのプレゼントなんじゃよ」

「えっ？よく知っている人って、まさか」

「二日ほど前だったかの。ふらっと現れて、東京に来たついでにどうしてもここのコーヒーが飲

みたいて」

胸がドキドキする。それはまるであの時の感覚。初めて彼に会ったときの、少女が恋をするような、甘酸っぱい思い。きっと今、わたしの顔は赤くなっている。思わず下を向いてしまった。「元気そうじゃったよ。それから、よろしく伝えてくれと言っておった。きっとあなたが現れるだろうからって」

「嘘、そんなこと、どうして」

「この店ではなにも不思議なことじゃない。ワシはもっと数奇なドラマをいくつも見てきた。もしかしたらこの店には物語をつむぎだす、不思議な力があるのかも知れん」

マスターがそういうと、お店に懐かしい音楽が流れだした。

「あ、この曲、懐かしい」

「たとえば音楽もそうじゃよ。その人が聞きたいと思っている音楽が、自然とラジオから流れることがある。きっと今、あなたはこの歌のように、甘くせつない思い出に充たされているんじゃないかな？」

「そうかもしれません。そういうことって、あるんですね」

「うん。うん。そうじゃな。おいしいコーヒーには素敵な物語と音楽、そして素敵な人が集まる。だからワシはコーヒーが大好きなんじゃよ」

わたしはその曲を最後まで聴いて店をあとにした。すっかり変わってしまったこの街。でもあの頃と変わらないコーヒーの香りと心のどこかに引っかかっている曲に耳に傾ければ、セピア色の思い出が街を覆い尽くし、10年前にタイムスリップできる。2009年の冬。そう、彼と別れてから10年。街の風景は移ろいで行くけど、素敵な音楽とコーヒーの香りは何も変わらない。

『土曜日のタマネギ』は、わたしの中で、大切な、大切な思い出。思い出の扉のカギ。背伸びしていた頃のわたしを見ることが出来る魔法の鏡。

わたしはひとり、暮れなずむ街の中を『土曜日のタマネギ』を口ずさみながら歩いた。

さよなら、ニンジン、ポテト

宇宙の果てにお帰り

胸に残り火ごと 残部捨ててきたと思ったのに

駅に向かう交差点。

信号待ちをしているとき、ふと誰かの視線を感じた。まさか、まさか彼？

おなべの底にタマネギ ひとりしがみついでる  
イヤヨ、アキラメナイ！...たぶんこれがわたしね

それは彼に良く似た背格好のぜんぜん別の人だった。

WHY.WHY.WHY? 今夜わたし  
いらないオンナになりました  
ころがる床の上

安心をしたのか、残念だったのか—或いは、その両方だったのかもしれない。わたしは懐かしさところそばゆさをお土産に、家路についた。

バカげた小指のバンソーコ 見せるつもりだった  
いっしょに笑ってくれないの？  
いつもの土曜日なのに

背伸びしていたわたし、バイバイ

おしまい

## 最後の晚餐～土曜日のタマネギ

<http://p.booklog.jp/book/11409>

著者：めけめけ

著者プロフィール：<http://p.booklog.jp/users/mequemeque/profile>

感想はこちらのコメントへ

<http://p.booklog.jp/book/11409>

ブックログのpapier本棚へ入れる

<http://booklog.jp/puboo/book/11409>

電子書籍プラットフォーム：ブックログのpapier（<http://p.booklog.jp/>）

運営会社：株式会社paperboy&co.